

- 珪化木製石包丁** ほかに、珪化木製の石包丁もみられる。V区包含層出土のS32は珪化木製の打製石包丁である。全体の形状は、S76と同様に上下両端に挟りのある瀬戸内沿岸地方の典型的なサヌカイト製打製石包丁と似ている。両側縁とも磨耗して丸みをもっており、どちらも刃部として使用された可能性がある。挟りはいずれもツブ状である。体部の溝など光沢があり、部分的な研磨がみられる。S77はS76と同じ弥生時代中期後半の住居跡から出土しており、こちらの刃部は外湾刃である。こうした珪化木は神戸層群中に産し、美濃川や加古川の川原にみることが出来る。
- 大型石包丁** S69の削器はサヌカイト製の大型石包丁と考えている。他にS60・S68は磨製の大型石包丁と考えた。これらの用途は不明である。
- 石 斧** 石斧は蛤刃石斧、柱状片刃石斧、偏平片刃石斧のほか、S28のような不定型石斧が出土している。弥生時代中期後半の住居跡から出土したS44、弥生後期の住居跡の埋土上層から出土したS80を除く全てが包含層からの出土であり、時期を特定できない。弥生時代前期に特定できる石斧は出土していない。
- 柱状片刃石斧** 柱状片刃石斧はS44のみである。ほぼ完形で住居跡の周壁溝から出土しており、このような出土状況は三田市中西山遺跡の弥生時代中期の住居跡でもみられた。石材は緑色片岩で、和歌山または徳島の三波川帯の石である。
- 偏平片刃石斧** II区包含層出土のS9は石包丁を転用した偏平片刃石斧で、全体に使用痕がみられる。V区包含層出土のS27は、側面は石の目にそって剥離した自然面のままである。直接接合しないため円化していないが、剥離した別の破片があり、もう少し幅の広い斧であったと考えられる。石材は黒色片岩で、三波川帯でも和歌山のものである可能性が高い。
- 太型蛤刃石斧** V区包含層出土のS26は太型蛤刃石斧で中心部に光沢がある。石材は緑色岩で、産地は不明であるが、徳島の三波川帯のものかと思われる。S80の石材は角閃岩で、やはり和歌山または徳島の三波川帯の石である。
- 不定型の石斧** V区包含層出土のS28は不定型の片刃の石斧である。石材は緑色片岩で、和歌山または徳島の三波川帯の石である。
- 石斧の比率** 柱状片刃石斧や偏平片刃石斧には完形品がみられるが、太型蛤刃石斧はほとんど破損品であるという状況は、畿内の弥生時代遺跡に共通する要素である。しかし、これらの石斧の量的な比率をみると、畿内のように太型蛤刃石斧が圧倒的多数を占めているわけではなく、畿内あるいは玉津田中遺跡と比べても、太型蛤刃石斧が少ないといえよう。また、当遺跡の石斧は、基本的には徳島あるいは和歌山といった他地域産の石材で作られており、未製品もみられない。
- 砥 石** 砥石には整形のもの、不整形のものがある。円化したものは遺構出土のもので整形のものが中心である。S71は直方体に近い形状で、小型で全ての面が研磨されている。S29・S52も欠損しているが、もとは直方体に近い形状であったと思われる。両者とも焼けている。S93は台形に近い平面形で、欠損しているがS51も同様の形状と思われる。S93の断面形をみると、研磨面が凹面になっていることがわかる。S55は自然礫をそのまま利用したような砥石である。S56・S19は大型の砥石であるが、欠損が著しく全体の形状は不明である。S19の円化した面が研磨されており、一部に火を受けたらしい痕跡があ

る。S 88は軟質でもろく、玉砥石ではないかと思われる。

石材は凝灰質砂岩、凝灰質砂質泥岩、凝灰岩、流紋岩質凝灰岩などで、いずれも加古川市域、宝殿周辺や神戸市北区、美薮川など比較的近隣でみられる石を用いている。時期の限定できる遺構から出土しているのはS 51とS 52で、いずれも弥生時代中期後半のものである。

**磨石・叩き石** 磨石・叩き石は遺構出土のものを中心に図化している。S 79・S 78・S 54・S 62はいずれも円礫をそのまま利用した磨石である。それ以外の磨石には何らかの加工がみられる。S 53は側面を、S 65は底面が加工されている。S 47はくぼみのある磨石である。S 53・S 54は弥生時代中期後半の遺構から出土している。これらの素材となる石材は、石英安山岩、流紋岩質火砕岩、細粒花崗岩、細粒ハンレイ岩などで、加古川あるいはその上流の丹波地方でとれる石が利用されている。

S 61・S 67は叩き石と考えた。S 67は弥生時代前期の遺構から出土している。砂岩および流紋岩質凝灰岩に属するもので、いずれも加古川ないしその周辺の石と思われる。

**石 皿** 石皿は弥生前期の遺構出土のS 66の1点を図化している。石材は流紋岩質多結晶溶結凝灰岩で西脇市または多可郡方面の石らしい。

**石 錘** S 94は有溝石錘である。これ1点のみの出土である。石材は安山岩溶岩で、氷上郡の佐治川源流付近あるいは加古川の川原にみられる石である。

ほかに軽石が2点ほど出土しているが、特に加工された痕跡はなく、その用途は不明である。

**石器と石材** 美乃利遺跡で利用されている石材は、四国の金山や二上山から搬入されるサヌカイトや和歌山や徳島の三波川帯の緑色岩・角閃岩・黒色片岩・緑色片岩など遠隔地産のものかめだつ。これらは石鏃や石包丁・石斧など、いかにも弥生時代を特徴づけるような種類の石器の素材として利用されている。

一方、加古川の川原に転石としてみられるような神戸履群や加古川の上流域に由来する石材ももちろん利用されているが、これらはいずれも砥石・磨石・叩き石・石皿といった石器に用いられている。これらの石器は比較的時期を限定しにくいタイプの石器であり、先に述べたように石斧や石包丁には近隣の石材を利用したものは少ない。

おなじ東播磨地方の玉津田中遺跡では、弥生時代中期には遠隔地産石材を用いた磨製石包丁ばかりでなく、砂岩を中心とする在地産石材を用いた磨製石包丁が生産されている。しかし、遠隔地産石材製の磨製石包丁がほとんどが身幅が狭くなるまで使い込まれているものが多いのに対して、砂岩製磨製石包丁は使用頻度が低かったことが想定されている。この砂岩製磨製石包丁は完成品の4倍もの未製品が出土しており、その実用性には疑問が残る。また、玉津田中遺跡においても磨製石包丁の2.5倍の量の打製石包丁が出土しており、こちらの使用頻度が高かったことが推測されており、その状況は美乃利遺跡と共通している。

石斧については、玉津田中遺跡でも美乃利遺跡と同様に未製品がみられない。したがって、在地産石材を用いた磨製石包丁の有無が、美乃利遺跡と玉津田中遺跡の石材利用の大きな相違点といえよう。

- 玉 類** 玉類は碧玉製の管玉2点とガラス製の玉1点がある。いずれも住居跡から1点ずつの出土であり、その性格は不明である。
- 管 玉** J1は弥生時代中期後半のSH05から、J2も弥生時代中期後半のSH06から出土している。両者とも弥生時代によくみられる細い小型の管玉である。両者とも素材は碧玉ではなく緑泥片岩であろう。なお、SH02とSH05から接合する碧玉（チャート）の原石が出土しているが、特に玉の素材として意識されていた様子は無い。
- ガラス玉** J3は弥生時代後期のSH15の中央土坑から1点のみの出土である。淡青色で、第4章第7節にみるように、肥塚隆保氏の分析によって、弥生時代に多量に流通するカリガラスであることが明らかになった。

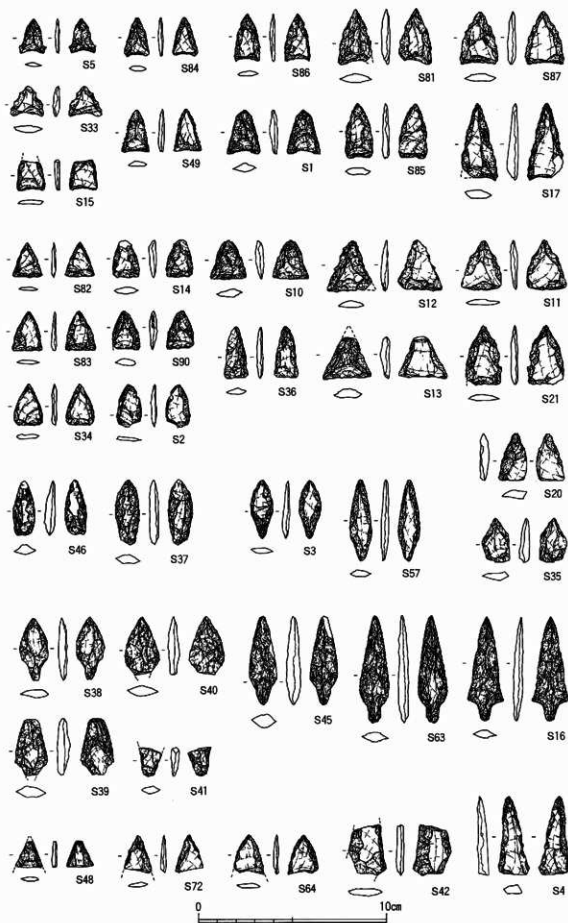
## 〔注〕

- (1) 藤原清尚「播磨南部における縄文時代の石器 一地域の現状と、その特色一」『網干善教先生華甲記念考古学論集』1988
- (2) 菅栄太郎「石鏃資料の型式および製作技法の編年学的検討」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅳ』1995
- (3) 藤田 淳「石器」『玉津田中遺跡Ⅴ』1995
- (4) 櫻井久之・高井健司ほか「長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅴ」1993
- (5) 松木武彦「弥生時代の石製武器の発達と地域性 一とくに打製石鏃について一」『考古学研究』第35巻第4号 1989
- (6) 福宜田佳男「打製短剣・石槍・石戈」『弥生文化の研究』第9巻弥生人の世界 雄山閣 1986
- (7) 岡壁忠彦「打製石包丁」『弥生文化の研究』第5巻道具と技術 雄山閣 1985
- (8) 平井典子「中・四国における弥生時代の石器について」『考古学ジャーナル』No.290 1988  
平井 勝『弥生時代の石器』考古学ライブラリー64 1991

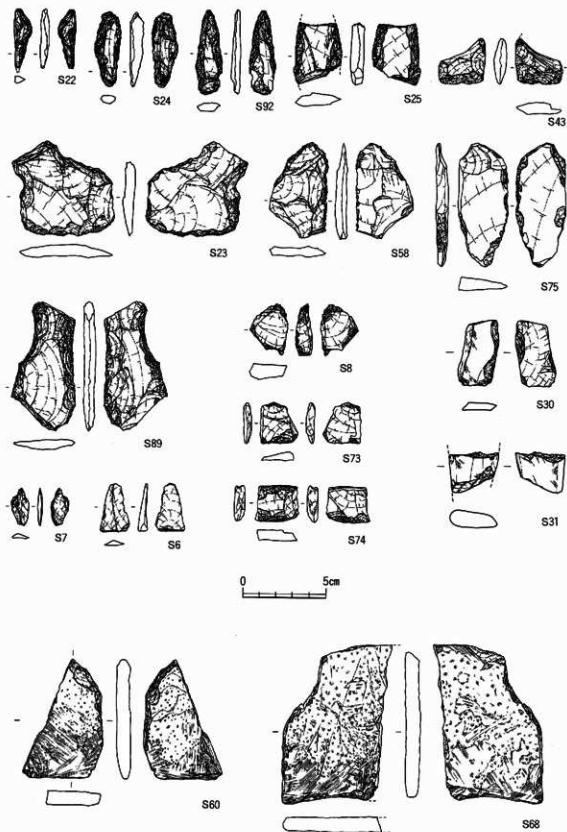
## 〔参考文献〕

- ・酒井龍一「石包丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」『考古学研究』第21巻第2号 1974
- ・酒井龍一「石器組成からみた弥生人の行動パターン」『文化財学報』第4集 1986
- ・蜂屋晴美「終末期石器の性格とその社会」『藤澤一夫先生古希記念古文化論叢』1983
- ・佐原 眞「石斧」『弥生文化の研究』第5巻道具と技術 雄山閣 1985
- ・森本 晋「石鏃」『弥生文化の研究』第9巻弥生人の世界 雄山閣 1986

第6節 石器及び玉類

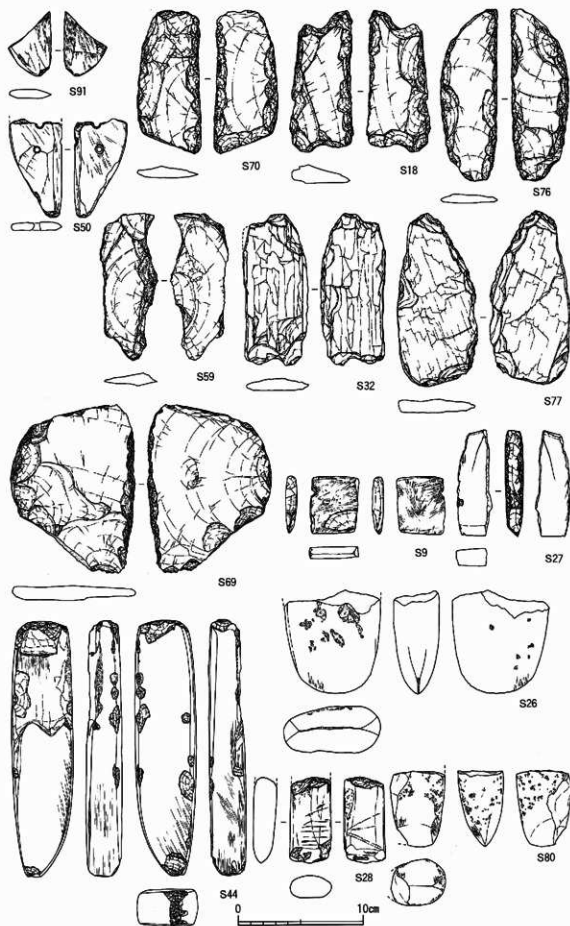


第244回 石器集成図(1)

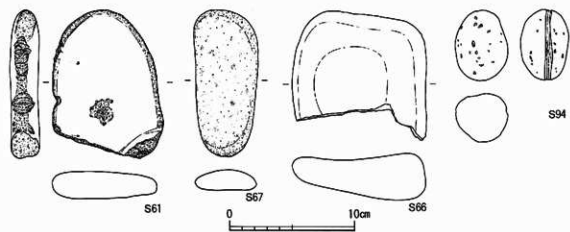
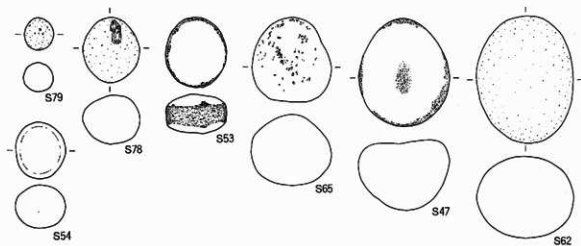
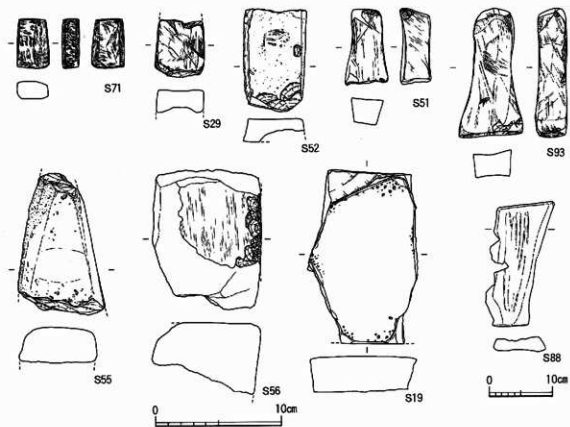


第245図 石器集成図(2)

第6節 石器及び玉類



第246回 石器集成図(3)



第247図 石器集成図(4)

第51表 石材鑑定表(サヌカイト以外)

No.	地区	遺 構	遺 物	材 質	備 考
S50	Ⅲ区	SD46	石包丁	緑色片石	和歌山 三波川帯か 徳島?
S91	V区	SK176	石包丁	凝灰質砂岩砂質泥岩	神戸層群 加古川川原
S32	V区	2面包含層	打製石包丁	珪化木	神戸層群 美濃川、加古川川原
S77	V区	SH14	打製石包丁	珪化木	神戸層群 美濃川川原
S60	Ⅱ区	SD48	大型石包丁片	灰青色砂岩 泥岩薄層はさむ	加西市南部福住付近?
S68	V区	SK31	大型石包丁片	凝灰質細粒砂岩 泥岩はさむ	姫路市海東町小原付近
S26	V区	2面包含層	大型蛤刃石斧	緑色岩	産地不明 徳島三波川帯か
S80	V区	SH10	大型蛤刃石斧	角閃岩	徳島 三波川帯か 和歌山
S27	V区	2面包含層	扁平片刃石斧	黒色片岩	和歌山 三波川帯か 徳島?
S44	I区	SH04	柱状片刃石斧	緑色片石	和歌山 三波川帯か 徳島?
S9	Ⅱ区	2面包含層	扁平片刃石斧	凝灰質砂質泥岩	神戸層群 加古川川原
S28	V区	2面包含層	石斧	緑色片岩	和歌山 三波川帯か 徳島?
S19	Ⅳ区	2面包含層	砥石?	凝灰質砂質泥岩互層	加古川市 北西部
S29	V区	2面包含層	砥石	凝灰岩	神戸層群 美濃川川原
S51	Ⅲ区	SD46	砥石	凝灰質砂岩	神戸層群 神戸市北区方面
S52	Ⅲ区	SD46	砥石 焼ける	流紋岩質凝灰岩	加古川市内
S71	Ⅳ区	SD100	砥石?	凝灰質砂質泥岩	神戸層群 加古川川原
S55	Ⅱ区	SD21	砥石	凝灰質砂岩	神戸層群 加古川川原
S56	Ⅱ区	SD33	砥石	凝灰質砂岩	神戸層群 美濃川川原
S93	V区	SD113	砥石	流紋岩質凝灰岩	加古川市域か宝殿
S55	Ⅱ区	SD48	砥石?	珪質シルト 凝灰質砂岩伴う	神戸層群 加古川川原
S88	V区	SK157	玉砥石	凝灰質砂岩	神戸市北区淡河町 美濃川川原
S47	I区	SD02	磨石	細粒ハンレイ岩	水上郡佐治川源流付近 加古川川原
S53	Ⅲ区	SD46	磨石側面研磨	石英安山岩	多可郡一水上郡 加古川川原
S54	Ⅲ区	SD46	磨石	流紋岩質火砕岩	多可郡 加古川川原
S62	Ⅱ区	SD48	磨石	安山岩	多可郡 加古川川原
S65	Ⅳ区	P17	磨石?	細粒花崗岩	大飯郡群中の礫 美濃川川原
S78	V区	SH10	磨石?	石英安山岩	水上郡 加古川川原
S79	V区	SH10	磨石	流紋岩質火砕岩	多可郡一水上郡 加古川川原
S61	Ⅱ区	SD48	叩き石?	細一中粒砂岩	神戸層群? 美濃川川原か?
S67	Ⅳ区	SK28	叩き石	流紋岩質弱溶結凝灰岩	加古川市? その周辺
S66	Ⅳ区	SK23	石皿	流紋岩質多結晶溶結凝灰岩	西脇市 多可郡方面
S94	V区	SD119	有溝石鐘	安山岩溶岩	水上郡佐治川源流付近 加古川川原
S98	V区	SK103	軽石	火山軽石	海岸? 伊豆七島新島
S7	Ⅱ区	2面包含層	剥片	珪質頁岩	加西市 加古川川原
S30	V区	2面包含層	剥片	頁岩	加西市 加古川川原
S31	V区	2面包含層	剥片	珪質頁岩	加西市 加古川川原



## 第7節 木製品

### 1. はじめに

今回出土した木製品は、墓であるSX04から出土した木棺材と、井戸であるSE01の井戸材と井戸内から出土した木片である。時期はSX04が12世紀前半、SE01が11世紀後半である。このように、出土した木製品は、遺構の性格も年代も異なるため、遺構間で比較することはできない。さらに、SX04は、木製品の遺存状況が悪いため全体の形状は不明である。

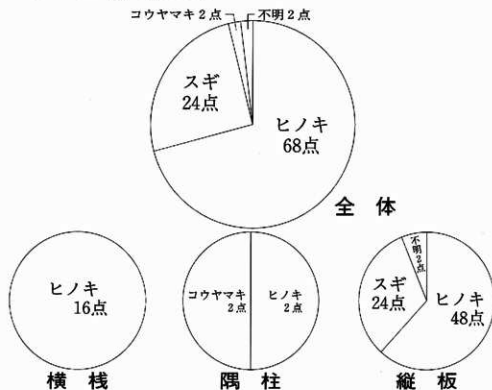
よってここでは、木製品の遺存状況が良く、資料数も多いSE01についてのみまとめることとする。

また、樹種同定の結果については第4章第3節にあるので、ここでは省略する。

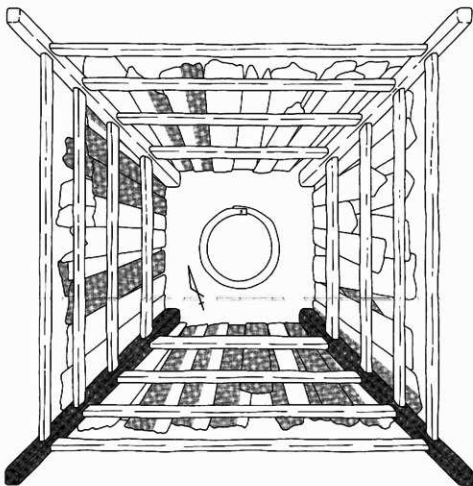
### 2. 井戸材使用樹種の構成比

SE01にどのような樹種がどのような割合で使用されているかを第248図に示した。全体的には、もっとも点数が多い縦板に使用されたヒノキが多く、次に同じく縦板に使用されたスギが多い。井戸部位別に見ると、縦板はヒノキがほとんどで、スギが3割程度使用されている。隅柱はヒノキとコウヤマキが2点ずつであるが、そのうちコウヤマキについては転用材である。横棧はすべてヒノキである。

以上から、ヒノキがもっとも多用されており、隅柱のコウヤマキは転用品であることから代用として使用されていることがわかる。また、縦板にはスギが3割近く使用されており、ヒノキとの関係が問題となる。



第248図 井戸材樹種比



第249図 SE01横式図（上からみたところ）

第249図に使用部位別に樹種を示した。縦板として利用されたスギはヒノキの中で散在して使用されているのではなく、北西隅と南辺付近にまとまっていることがわかる。このことは、縦板を組み立てる際に、井戸材は樹種ごとにまとめられていたものと推定できる。

### 3. 井戸の製作方法

事実報告で示したように最下段の横桟はすべて接合することができ、2段目の横桟についても2点が接合することができた。このことは、井戸を組み合わせる現地において、部材の木取りが行われたことを示しているものと思われる。ある程度の加工（板材など）は現地に運ばれる前に行われていたことは想像に難くないが、各部材の切離しは少なくとも横桟については現地で調整しながら行われたものと考えられる。縦板については接合関係は明らかにすることができなかったが、樹種ごとにある程度のまとまりがあることから、現地で板材に加工したが、あるいは切り出した板材を樹種ごとにまとめていたものと思われる。逆に樹種の特徴に合わせて使用するためには、部材は樹種ごとにまとめて保管されていたと考えるのが最も妥当である。

## 第8節 瓦

**出土遺構** 美乃利遺跡において、瓦が出土している遺構の大半は溝であり、包含層からも出土している。当遺跡近辺には現在のところ古代や中世の寺院は知られていない。若干量とはいえ瓦が出土するという事実は当遺跡の性格を考える際に重要であり、したがって極力小片も図化をおこなった。

**時期** 軒瓦はIV区SD21出土の345だけである。この軒平瓦の文様とよく似た瓦は三木市平井窟跡群から出土している<sup>1)</sup>。この窟跡群からは尊勝寺観音堂、鳥羽権宮跡と同文様の軒瓦も出土している。それに似た文様の軒瓦は神出窟跡群堂ノ前小支群からも出土している。この溝は出土した土器から11世紀後半に掘削され12世紀前半に埋没していると考えられる。したがってこの瓦に伴う両面をナデ調整した平瓦もその時期のものといえよう。

それ以外には全て普通の平瓦と丸瓦であり、細かな時期を判断するのが困難である。もっともまとまった量の瓦が出土しているSD98は、奈良時代から平安時代に下る土器も出土する時間的に幅のある遺構である。そこで、この節では当遺跡から出土した瓦の形態的な特徴をまとめるだけとした。

**平瓦** 美乃利遺跡出土の平瓦に施されたタタキの大半は小穴丸遺跡の報告書でA類とされている割線によるタタキ目であり<sup>2)</sup>、11のような正格子、1333や1335のような長方形の格子、38や1336のような斜格子、7のように不規則な文様のものがある。また、1332や1333のように細長いタタキ目を縦方向に装飾的にほどこす例がある。

また、少量ではあるが、縄タタキ（小穴丸遺跡のB類）のものも出土している。縄タタキは21や1424のようにきわめて細かいもの、1337のようにやや粗いものがある。ほかに、1338のように表面の凹凸が著しく、タタキ板の判別が困難な粗雑なものがみられる。

**布目** 1331の凸面には縦方向の細かいハケが施されており、飛鳥時代にさかのぼる可能性がある。この瓦の凹面の布目はかなり細かい。1425は端面にまで布目が及んでいた。また、1335など凹面の布目を縞状にナデ消す一群が存在する。

**丸瓦** 丸瓦は玉縁をもつものが大半と思われる。外面はナデであり、玉縁の内面にカキメ状の痕跡が残るものもある。

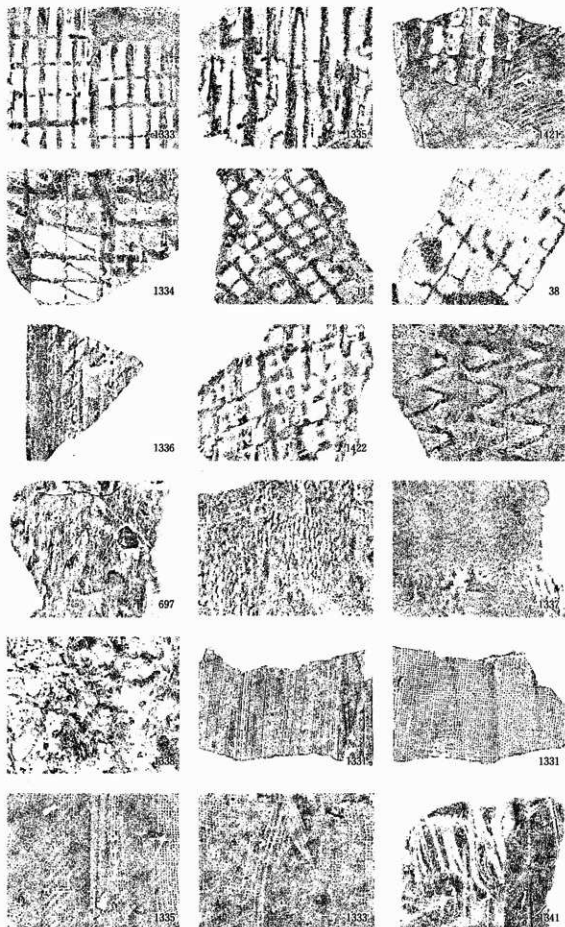
**焼成** 当遺跡の瓦の焼成は、加古川周辺の古代の瓦によくみられる、きわめて軟質のものが多い。色調も灰色よりむしろ土師器にちかような橙色や黄灰色のものがみられる。そして二次的に焼けていたり、ススが附着しているものがめだつ。

**胎土分析** 第4章第2節の蛍光X線分析の結果から、美乃利遺跡の瓦の胎土はいくつかのグループに別れることが分かっている。そしてSD98出土の粗い長方形格子タタキの1335とV区包含層出土の斜格子タタキの1422の瓦は同一の場所で作ったことが判明している。両者はタタキは異なるが凹面の布目を縞状にナデ消す手法は共通しており、興味深い。

## 〔注〕

- 1) 中村 浩、毛利哲夫、松村正和「加古川流域の須恵器窟跡群」『久留美毛谷』1990
- 2) 山根実生子「小穴丸遺跡出土の瓦について」『小穴丸遺跡Ⅰ』兵庫県教育委員会 1987

第8節 瓦



第250圖 出土瓦拓影

## 第9節 金属製品

## 1. はじめに

今回の調査で出土し、図化できた金属製品は7点(M1～M7)に限られる(第251図)。出土地点もV区出土のM4を除いては全てIV区から出土している。また、出土層位も第2面に伴うM3を除いてはいずれも第1面に伴うものである。このなかで、遺構に伴うものは、SE01出土のM5・M6とSD36出土のM7に限られる。

## 2. 出土金属製品の概要

**出土器種** 鉄釘(M1・M2・M5・M6)、U字形鋤先(M4)、鉄鎌(M3)、鈔帯(M7)が出土している。

**鉄釘** いずれもIV区第1面に伴って出土している。いずれも断面方形を呈する角釘である。SE01出土のM5・M6については、井戸の隅柱に打ち込まれていたものである。この井戸の埋没時期が11世紀後半である(第5章第5節)ことから、おおよそ平安時代中期のものと考えられる。

	IV	V区	V区
	遺構内	遺構外	遺構外
第1面	<p>M5 M6 SE01 SD36 M7</p>	<p>M1 M2 M4</p>	<p>M4</p>
第2面		<p>M1 M3</p>	

第251図 美乃利遺跡出土金属製品

## 第9節 金属製品

遺構に伴わなかったM1・M2についても、出土層位から判断して、平安時代を中心とする時期のものと考えられる。

**U字形鑄先** 身部の一部が残存するのみである。当製品についても、遺構外から出土しているため時期の特定は困難であるが、V区第1面に伴って出土していることから、中世後半以降と考えられる。

**鉄 鎌** 約1/2残存する。刃部中央における刃幅2.2cm、厚さ4mmを測る。当製品も遺構に伴わないため時期の特定は困難であるが、IV区第2面から出土していることから、出土土器を考慮に入れると奈良時代以降と考えられる。

**銅 帯** 銅製の巡方が出土している。2.35cm×2.60cmの平面規模から判断して、佐藤興治分類<sup>(1)</sup>のA-IVにあたり、大初位に相当するものである。当製品はIV区第1面のSD36から出土しているが、共存した土器から奈良時代の遺構と判断される。

### 3. ま と め

今回報告した金属製品のなかで最も特筆すべきものは、M7の鈔帯である。巡方の1点のみであるが、当該期の当遺跡の性格を考えるうえでひとつのヒントとなるものと考えられる。掘り方の平面形が方形をなす柱穴からなる掘立柱建物群を検出していること等をも考慮に入れると、官衛的な性格をもった施設が存在が考えられる。

#### [注]

(1) 佐藤興治ほか『平城宮発掘調査報告書VI』奈良国立文化財研究所学報第23冊 1975

## 第6章 遺構の検討

### 第1節 水田跡

#### はじめに

今回の調査では、2面(第3面・第4面)にわたって水田跡を検出している。2面とも弥生時代前期末～中期初葉(第5章第1節)の遺構面より下層で検出していることから、弥生時代前期までさかのぼるものと考えられる。以下、上記の水田跡について若干の検討をくわえてみたい。なお、第3章で報告した水田跡の各区画の番号であるが、第3面Ⅰ区→Ⅲ区→第4面Ⅰ区→Ⅴ区の順に通し番号で付けている。

#### 1. 下層の水田跡(第4面)

**概要** Ⅰ区からⅤ区にかけての調査範囲のほぼ全域にわたって検出している。計1,090区画検出し、その面積は約6,600㎡に及ぶ。一部上層の遺構の影響を受け、残存しない箇所も認められるが、全体的に良好な状態で検出することができた。

**水田区画** 当面で検出した水田跡は、いわゆる小区画水田の範疇で捉えられるもので、方形もしくは長方形を基本形としている。なお、各区画の詳細なデータは第3章を参照された。

**各区画の面積** 第3章のデータをもとに地区ごとおよび全体の区画の平均面積をまとめたのが第52表である。これによると、当面的水田跡の平均面積は3.62㎡となる。これは約1坪強、2畳強にあたる。これを、地区ごとに各区画の面積の分布状況をまとめたのが第252図である。これによると、検出した区画の少ないⅡ区とⅢ区をのぞいては、おおよそ平均面積を中心に正規曲線が描かれる。ただし、地区ごとに細かくみると、Ⅰ区では平均面積が2.22㎡(第52表)と全体の平均面積より狭い傾向にあるが、各区画の面積の分布は正規分布を示す。これに対してⅣ区・Ⅴ区は平均面積がそれぞれ5.59㎡・4.60㎡と全体の平均面積より広い傾向にあり、分布曲線も全体の平均面積よりも広い方に偏っている。

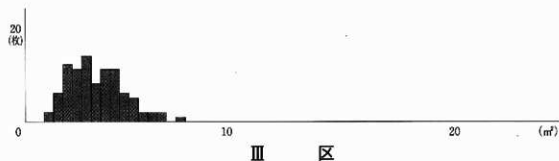
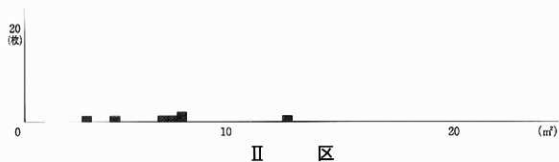
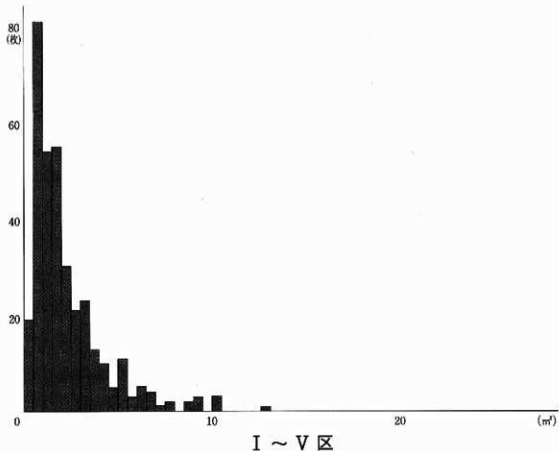
**水田の立地** 次に第3章で報告したⅠ区からⅤ区までの平面図を1枚の図にし、これに水田面の標高をもとに復元した等高線を平面図に重ねたのが第254図・第256図である。これによると、当面的水田跡は標高5.40mから6.40mまでの約1mの比高差をもって広がっている。そして、Ⅳ区を中心に舌状に張り出すとともに、Ⅲ区からⅡ区にかけてわずかに谷地形をなす

第52表 第4面水田跡地区別平均面積(㎡)

Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	Ⅳ区	Ⅴ区	全体
2.22	7.44	3.74	5.59	4.60	3.62

第1節 水田跡

とともに、I区の南東部へのびる谷地形も認められる。この他、IV区からV区にかけても大きな谷地形が入り、それ以西は他より急傾斜をもって高くなっている。そしてこの箇所の等高線の間隔が特に狭くなっている。また、I区においてもII区～IV区と比較すると等高線の間隔が狭い傾向にある。

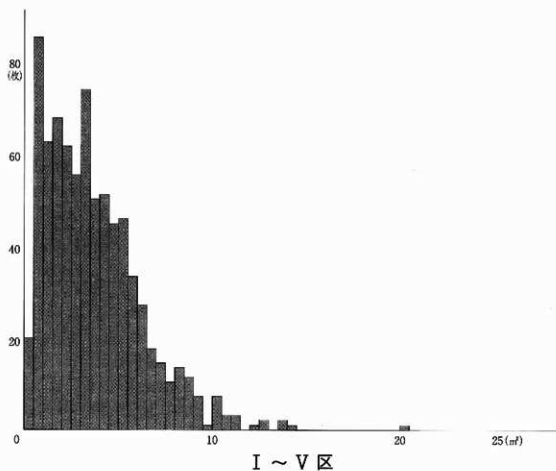
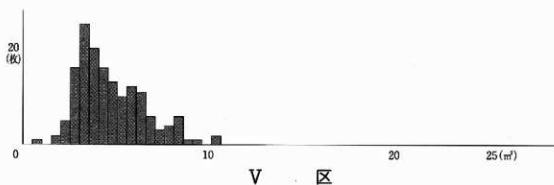
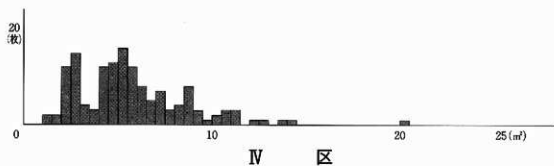


第252図 第4面水田跡の面積分布 (1)



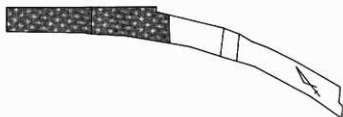
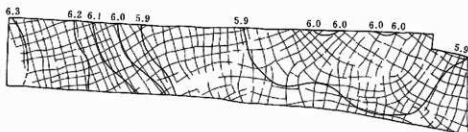
勾配 ちなみに、IV区西端からV区にかけての水田面の標高から復元した勾配は5.3%で、II区からI区にかけての勾配は2.6%である。

さらに第254図・第256図に全体の区画の平均面積の50%以下（1.81㎡以下）と200%以



第253図 第4面水田跡の面積分布(2)

第1節 水田跡



第254図 第4面水田跡と等高線（Ⅳ・Ⅴ区）

上（7.24㎡以上）の区画をそれぞれ示したのが第255図・第257図である。これによると、200%以上の区画は、例外もあるが、概ね等高線の間隔の広い箇所 distributes。Ⅴ区の等高線の間隔の狭い箇所に認められる200%以上の区画についても、平面形が長方形を呈する。

以上から、水田面を水平にする必要性および作業の効率化から、傾斜の急な箇所では広い区画の造成を避けたものと考えられる。つまり、水田の区画は、微地形に合わせた形で造られていることが理解できる。

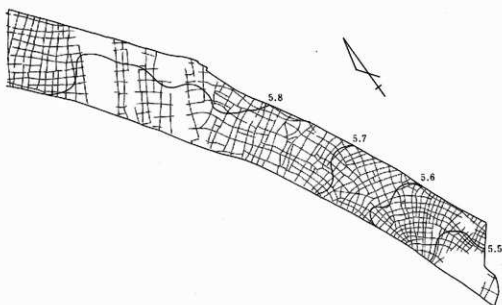


1.81㎡以下



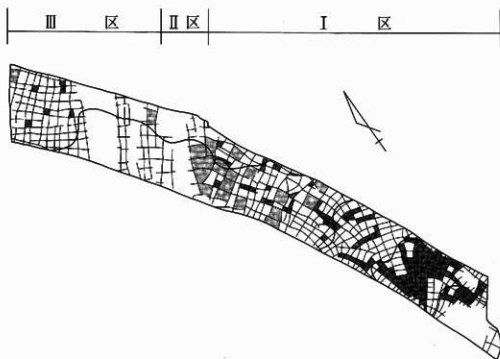
7.24㎡以上

第255図 第4面水田跡の広狭面積の分布（Ⅳ・Ⅴ区）



第256図 第4面水田跡と等高線（Ⅰ～Ⅲ区）

上記の特徴を、第254図・第256図の畦畔の方向と等高線との関係にもみることができる。特に、Ⅰ区・Ⅳ区・Ⅴ区でこの特徴が顕著にみることができる。つまり、畦畔と等高線が重なる箇所がいくつか認められる。以上から、畦畔を造るにあたっては、水田面を水平にしやすいよう微地形に対応させているようすを読み取ることができる。そして、この意図が各区画の平面形にもある程度反映しているものと考えられ、Ⅴ区の等高線の間隔の狭い箇所では細長い長方形の区画が目立つ。



第257図 第4面水田跡の広狭面積の分布（Ⅰ～Ⅲ区）

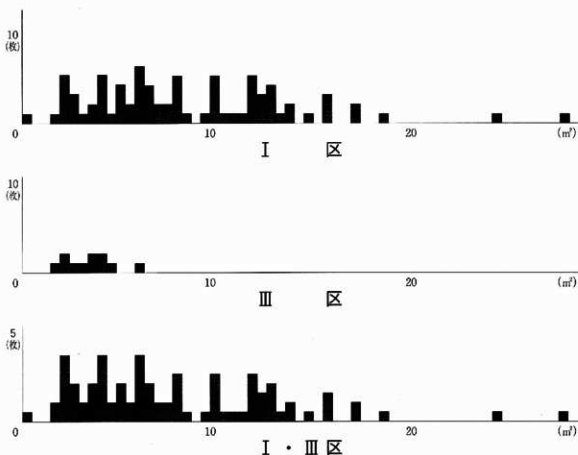
## 2. 上層の水田跡 (第3面)

**概要** I区第3画(2)、II区・III区第3面で検出した水田跡である。計213区画検出し、その範囲は約2,700㎡に及ぶ。全体的に上層の遺構の影響を受けているため、決して検出状況は良好と言えるものではない。特にII区では上層の遺構の影響が顕著で、完存する区画は検出できなかった。

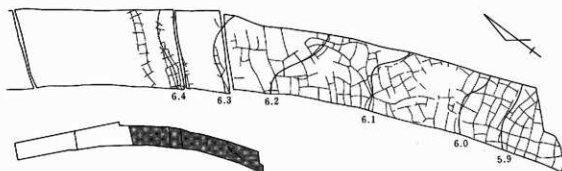
第53表 第3面水田跡地区別平均面積 (㎡)

I 区	II 区	III 区	IV 区	V 区	全 体
8.95		3.49	—	—	8.27

**面積** 第3章でのデータをもとに地区ごとおよび遺跡全体での水田区画の平均面積をまとめたのが第53表である。なお、各区画の詳細なデータについては第3章を参照されたい。第53表によると、I区からIII区の1区画の平均面積は8.27㎡である。これは、下層の水田跡の約2.3倍である。これを、地区別および当面全体での0.50㎡ごとの分布状況を表したのが第258図である。まず地区ごとの分布をみると、I区では、20.0㎡を越える2区画を除くと、平均面積の8.27㎡がほぼ中央値に近い数値である。これに対し、III区では最も広い区画が6.00㎡で平均面積より広いものは認められない。次に、第3面全体での分布をみると、



第258図 第3面水田跡の面積分布



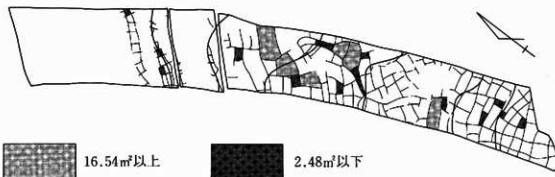
第259図 第3面水田跡と等高線（Ⅰ～Ⅲ区）

Ⅰ区の $20.0\text{m}^2$ を超える2区画を除くと、ほぼ平均面積が中央値に近い。ただし、この数値が分布曲線の頂点ではなく、その頂点はより狭くなる。以上から、当面の水田跡は、一部の区画を除くと、平均面積以上に狭い区画が基本であったことがわかる。

**水田面の標高** 次に、第3面の水田跡をⅠ区からⅢ区までを1枚の図にし、そこに等高線を重ねたのが第259図である。これによると、当水田跡は標高 $5.80\text{m}$ から $6.50\text{m}$ の間の約 $70\text{cm}$ の比高差をもって広がっている。このなかで、 $6.00\text{m}$ から $6.20\text{m}$ の間が他の等高線の間隔より広いことがわかる。ちなみに、Ⅲ区～Ⅰ区にかけての平均勾配は $6.0\%$ で、最も急な箇所では $8.0\%$ である。

次に、この図に水田区画の平均面積の $200\%$ （ $16.54\text{m}^2$ 以上）を超える区画に網をかぶせたのが第260図である。これによると、先に等高線の間隔があいていると指摘した $6.00\text{m}$ から $6.20\text{m}$ の間に上記のような区画が多く分布することがわかる。逆に、平均面積の $50\%$ 以下（ $4.13\text{m}^2$ 以下）の区画は、等高線の間隔の狭い区域に比較的多く分布する。

以上から、下層水田で認められたのと同様、上層水田でも等高線と水田区画の面積は無関係ではないことが理解できる。これは、水田を造成するにあたって、水田面を水平にする必要性から考えると、必然の結果と考えられる。このため、第259図の等高線と畦畔の関係をみると、そのラインが一致する箇所の多いことに気づく。これも、水田造成にあたっての上記と同様の必要性からくる結果と考えられる。



第260図 第3面水田跡の広狭面積の分布（Ⅰ～Ⅲ区）

## 3. ま と め

**立 地** 以上、上層水田と下層水田とに分けて、水田の区画の面積・水田域の微地形・畦畔の方向等から、水田造成の特徴を検討してきた。この結果、基本的には、下層・上層ともに、その基本は同じであることが明らかとなった。これは、当遺跡の水田域の立地が、微高地縁辺部の緩斜面に立地することに起因するものと考えられる。そして、この立地の特徴は、<sup>(1)</sup>上築普通・<sup>(2)</sup>森岡秀人・<sup>(3)</sup>高橋 字がすでに指摘しているように、近畿地方中央部の弥生前期の水田跡の立地と一致するものである。そして、<sup>(4)</sup>上築普通による水田立地の分類によると、当遺跡の立地はB類に対応するものと考えられる。

さらに、本報告書の外山報告（第4章第8節）によると、弥生時代前期中葉までは、氾濫原面の自然堤防帯の低地に立地するのに対して、同後半以降は微高地縁辺部のような高燥な土地条件のところにも拡大するようである。当遺跡の立地は後者にあたり、時期的にも合致する。

なお、水田跡の立地する地形環境の詳細については、第4章第9節を参照されたい。

**小区画水田** 上層水田・下層水田ともに、いわゆる小区画水田に分類されるものである。美乃利遺跡より古く位置付けられている六甲山南麓西部の戎町遺跡では、区画の規模は $3.20\text{m}^2\sim 9.33\text{m}^2$ で、平均で $5.51\text{m}^2$ と報告されている。平均面積で比較すると、上層水田はこれより広く、下層水田はこれより狭くなる。検出面積にかなりの差があるため、すなおに比較することは困難であるが、戎町遺跡の最小規模の区画が下層水田の平均値に近い。また、同じく六甲山南麓の東側に位置する本庄町遺跡（弥生前期後半）では、各区画の面積が $4.15\sim 28.5\text{m}^2$ と報告されている。以上から、下層水田の平均面積は、他の例と比較しても狭い区画であるといえるのではないかと考えられる。

**地形の変化** ところが、上層水田と下層水田とに顕著な差も認められる。それは、先にも触れたが、区画の平均面積である。上層水田が下層水田の約2.3倍を越える面積である。これは、微地形の変化によるものと考えられる。つまり、下層水田面に洪水砂が堆積した結果、第4面よりもわずかに平坦になり、より広面積の区画の造成が可能となったものと考えられる。前項までの検討で、下層水田の調査範囲内における比高差が約1m、上層水田の比高差が50cmと報告したように、上層水田の方が検出範囲が限られているにもかかわらず上層水田の比高差が下層水田の約1/2になっていることがわかる。また、具体的に両層での比較が可能ない区についてみると、両面とも谷地形となっているが、上層の方がより緩やかな谷地形となっていることが読み取れる（第256図・第259図）。

ところで、上記の変化に関連して、調査範囲内において、上層水田の検出面積が狭くなっているのは、実際の水田域の面積が減少したことを反映しているのではなく、上記の微地形の変化によるものであることを明記しておきたい。つまり、前段階より平坦化が進むことにより微高地が拡大し、前段階では水田であった箇所に住居域等が拡大するとともに、前段階では耕作できなかった低地に水田の造成が可能になったことを示しているものと考えられる。よって、微高地の拡大に伴い、上層水田が調査区の南東・南・南西側へ広がっていったものと考えたい。

以上のことから、両面の水田跡の比較においても、1・2で確認した微地形に対応した

水田造成がより敏感に行われていたことが理解できる。

#### 配水方法

ところで、下層では6,600㎡を超える広範囲にわたる水田跡を検出したにもかかわらず、水路と考えられる溝は検出されていない。調査範囲がトレンチ状を呈するため、調査区外にある可能性も否定しきれない。しかし、微地形の変化が顕著であるにもかかわらず検出できなかったことから、水路等の施設はなかった可能性が高いと考えられる。よって、各区画への配水はオーバーフローによってなされたものと考えられる。ただし、一部の畦畔には水口状に途切れた箇所が少なからず認められ、この箇所に鉄分の集積が認められる。したがって、基本的にはオーバーフローによってなされたものと考えられるが、一部は水口を通してなされたのではないかと考えられる。ただし、当水田跡の埋没時期によっては水口の検出可能な時期と不可能な時期が考えられることも考慮に入れる必要があろう。このような配水方法についても、工業普通<sup>(7)</sup>・森岡秀人の両氏によって、近畿地方の弥生前期水田跡についてすでに指摘されていること一致する。ただし、その順路等については復元できなかった。

なお、今回の調査対象範囲外となったV区北西側の確認調査で、弥生時代前期までさかのぼると考えられる溝を確認している。この溝が用水路となる可能性が考えられる。今後の調査結果をまちたい。

#### 花粉分析

ところで、致地点において各水田土壌層を採取し、プラントオパール<sup>(8)</sup>の分析を行っている(第4章第8節)。詳細は当報告にゆずるが、両面ともイネのプラントオパールの検出量はわずかである。このため、両面とも水田として機能した期間が極端に短いのではないかと考えられる。極端すれば、耕作期間がわずか1期であった可能性も考えられる。

#### 集落との関係

最後に、当遺跡で検出した水田跡と集落(居住域)との関連について触れておきたい。

##### 下層水田

調査範囲のほぼ全域で水田跡を検出したため、居住域の一部も検出されていない。このため集落との位置関係は明確にできないが、復元される微地形から判断して、水田域の北～北西側に想定される。

##### 上層水田

Ⅲ区～V区にかけて同一面で土坑・溝等の遺構を検出しており、景観的に集落と生産域との復元が一部可能である。ただし、生活域での検出遺構が土坑・墓・溝に限られることから、集落の縁辺部と考えられる。いずれにせよ、上層で検出した水田域は集落により近い位置にあることは明らかである。

#### 小 結

以上、2面にわたって検出した弥生時代前期後半の水田跡についてまとめてきた。当遺跡の調査以前は、加古川下流域においては、水田跡は未検出であった。他地域における調査例の増加から、当然予想されたことであるが、当地域において水田跡が検出された意義は大きいものと考えられる。しかも、近畿地方における当該期の水田造成技術・選地等の特徴と比較して、ほとんど共通するものであることが明らかとなった。

さらに、森岡秀人がまとめているように、近畿地方において初期水田址として本格的な水稲耕作の開始が確認できるのは、戎町遺跡で前期前半まで遡る可能性が指摘されている以外は、弥生時代前期後半である。したがって、当遺跡で検出した水田跡の時期は、近畿地方における稲作の開始期にほぼ近いものといえる。よって、当地域においては、近畿地方における稲作の初期の段階から水稲耕作が行われていたものといえよう。

ところで、このような技術等の伝搬の背景として、西側（中部瀬戸内地方）と東側（畿内中心部）から考えられる。岡山県津島江道遺跡<sup>註</sup>では先I期まで遡る、同百間川原尾島遺跡<sup>註</sup>・百間川沢田遺跡<sup>註</sup>では前期後半まで遡る小区画水田が、それぞれ検出されている。つまり、中部瀬戸内においては、初期の段階から美乃利遺跡とほぼ同様な技術をもって水田造成がなされているものであり、西側からの伝搬の可能性が大いに考えられる。今後、西播磨地方における当該期の水田跡の検出を待ちたい。

〔注〕

- (1) 工業普通『水田の考古学』東京大学出版会 1991  
工業普通『水田と畑』『弥生文化の研究 2 生業』雄山閣 1988
- (2) 森岡秀人「近畿地方における稲作農耕の開始と展開」『日本考古学協会設立40周年記念シンポジウム 日本における稲作農耕の起源と展開』日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会 1988
- (3) 高橋 学「埋没水田の地形環境分析」『第四紀研究』27巻4号 1989
- (4) 前掲(1)
- (5) 山本雅和「戎町遺跡 第1次発掘調査概報」神戸市教育委員会 1989
- (6) 片岡 肇『本庄町遺跡発掘調査報告書』財団法人 古代学協会 1985
- (7) 前掲(1)
- (8) 前掲(2)
- (9) 森岡秀人「初期稲作受容期の一様相 一大阪湾沿岸の場合」『今里幾次先生古希記念播磨考古学論叢』今里幾次先生古希記念論文集刊行会 1990
- (10) 柳瀬昭彦「中国・四国地方における稲作農耕の開始と展開」『日本考古学協会設立40周年記念シンポジウム 日本における稲作農耕の起源と展開』日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会 1988
- (11) 前掲(9)
- (12) 前掲(9)



## 第2節 住居跡






## 1. はじめに

今回の調査で検出された住居跡はすべて竪穴式住居で、建て替えを含めて19棟、建て替えを除いて16棟である。遺構の遺存状況は、SH06・SH08・SH10などは悪いが、それ以外の住居跡はほぼ完全に検出されている。しかし、遺物の遺存状況はSH01・SH02・SH05・SH15などは良いが、それ以外の住居跡からはほとんど遺物が出土していない。よって、出土遺物の少ない住居跡の時期設定については、他の遺構との切り合いなどの他に、主に中央土坑の形態によって設定している。確認できたものは全て中期後半から後期のもので、遡る可能性のあるものもある。住居跡の平面形は、円形、あるいは円形と思われるものが10棟、楕円形のもの1棟、隅円方形（以下、方形）のものが7棟、隅円長方形（以下、長方形）のものが1棟である。

以下、住居跡を構成する要素についてまとめるが、それらを一覧表にしたものが第54表である。

第54表 住居跡一覧表（下線は推定値）

遺構番号	平面形	全長 (m)	深さ (m)	床面の 標高 (m)	床の 面積 (㎡)	柱 数	中央土坑		高 床 部	土 坑	他 の 柱	竪穴土 器	備 考	時 期	
							間 隔	深 (cm)							
01古	円形	8.3	0.22	6.00	58.2	7	2.4	c	30	×	1	2	×	中期後半	
01新	円形	8.3	0.22	6.00	58.2	7	2.4	c	30	×	1	2	×	サヌカイト363.2g	中期後半
02	方形	4.1	0.10	6.26	20.3	4	2.3	c	24	×	×	×	×	サヌカイト11.0g	中期後半
03	方形	6.4	0.20	6.06	29.7	4	3.6	a	-	×	2	×	×		中期後半以前
04古	方形	7.0	0.06	6.20	43.7	4	2.9	c	23	×	×	×	×	サヌカイト8.9g	中期後半
04新	方形	7.3	0.06	6.20	47.6	4	2.9	c	23	×	×	×	×	サヌカイト6.7g	中期後半
05	円形	5.4	0.05	6.40	20.6	4	2.2	c	26	×	1	2	○	サヌカイト15.3g、菅玉	中期後半
06	円形	<u>6.3</u>	0.15	6.32	<u>31.2</u>	<u>4</u>	2.7	?	?	×	?	×	×	サヌカイト10.7g	中期後半
07	方形	4.7	0.13	6.63	20.8	5	2.0	d	35	×	×	×	×	サヌカイト10.5g	中期後半
08	円形?	?	0.06	6.74	?	?	1.8	c	30	×	×	2	×		中期後半
09	楕円形	3.5	0.14	6.56	9.5	2	2.2	a	-	×	1	1	×	サヌカイト1.9g	中期後半以前
10	円形?	?	0.03	6.75	?	?	2.2	?	?	×	?	×	×	サヌカイト0.7g	中期後半?
11	円形	8.4	0.05	6.70	52.8	?	2.4	c	59	×	×	2	×	サヌカイト5.3g	中期後半
12	長方形	3.6	0.07	6.72	15.4	2	1.2	b	8	×	1	×	×	サヌカイト0.9g	中期-?
13	方形	4.8	0.10	6.74	16.3	4	1.9	c	16	×	1	×	×	サヌカイト27.3g	中期後半
14古	円形	8.5	0.08	6.77	52.4	5	3.4	b	55	×	×	×	×		中期後半
14新	円形	8.5	0.08	6.77	52.4	6	2.9	b	55	×	×	×	×	サヌカイト60.2g	中期後半
15	円形	7.1	0.53	6.40	39.0	4	3.4	e	28	×	×	×	×	サヌカイト33.9g、ガラス玉	後期後半
16	方形	5.7	0.05	6.74	<u>32.5</u>	<u>4</u>	2.4	d'	19	○	×	×	×	サヌカイト0.8g	後期

	a	b	c	d	d'	e
形 態						
具 体 例	SH03 SH09	SH14 古 SH14 新 SH12	SH01 古 SHI04 古 SH01 新 SH04 新 SH05 SH13 SH02 SH11 SH08	SH07	SH16	SH15

第261図 中央土坑分類図

## 2. 中央土坑の形態と時期

まず時期別変化が最も著しい中央土坑の形態について示し、時間の軸を設定しておく。  
分類 第261図は中央土坑の形態と対応する住居跡の例を示している。主にその平面形のセット関係により a～e の6つに分類した。

- a —— 中央土坑が認められないもの。
- b —— 炭の認められる楕円形の中央土坑。
- c —— 炭の認められる楕円形の中央土坑 (A) と円形の中央土坑 (B) のセット。
- d —— c の周囲を土手で囲った中央土坑で、円形の中央土坑 (B) が2段掘りになっているもの。
- d' —— 炭の認められる中央土坑 (A) が無く、その痕跡のみ認められるもの。
- e —— 炭の認められる中央土坑がなく、2段掘りの円形の中央土坑のみのもの。

この内、時期が明らかとなっているのは、中期後半以前である SH03・SH09、中期後半である SH01・SH02・SH05、後期後半である SH15・SH16 である。これらと同じ形態の中央土坑をもつ SH04・SH08・SH11・SH13 についてもそれぞれ時期を比定することができる。  
時期別変化 これらをまとめ、さらに型式学的方法を利用すると、中央土坑はおおまかに a→b→c→d→d'→e の順に変化したと考えられる。ただし、重複する期間もあるため、あくまで出現する時期の順であることに注意しなければならない。

よってここでは、細かい順序は使用せず、第54表のように大きく「中期後半以前」、「中期後半」、「後期」の3つに分けることとする。

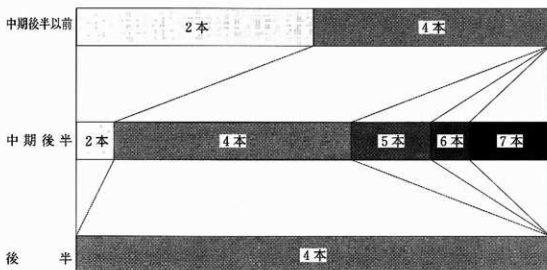
## 3. 支柱穴と床面積

支柱穴と床面積の関係について検討する。

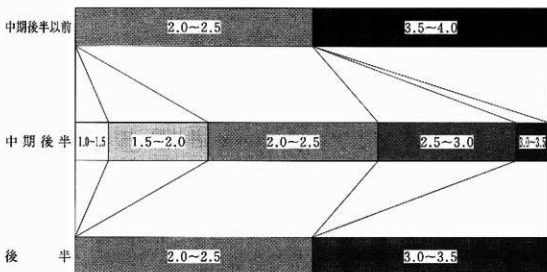
支柱穴 支柱穴については、本数、柱間について検討する。

本数 支柱穴の本数の時期別変化を第262図に示した。

中期後半以前では、資料数が少なく、その比率も不安定であるが、2本か4本と比較的少ない。中期後半になると、4本が多いものの、2本から7本まで多様化している。後期になると、4本のみからなり、定形化した感がある。



第262図 主柱穴変遷図



第263図 柱間変遷図

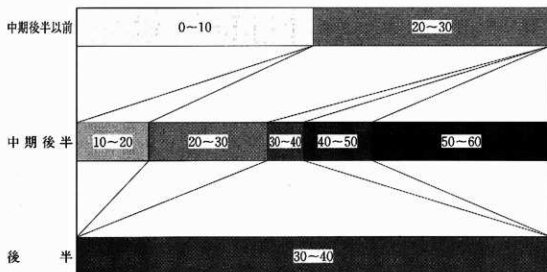
**柱間** 柱間についても同様に時期別変化を第263図に示した。

中期後半以前では2.0m～2.5m、3.5m～4.0mと長い柱間をもつものもあるが中期後半になると1.0m～3.5mの幅で多様化している。これは後期になると、2.0m～3.5mの間に収まり、定形化している。

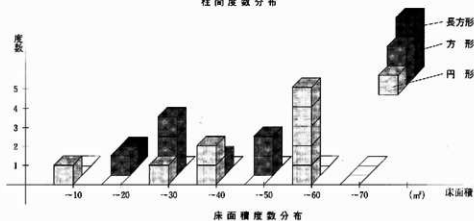
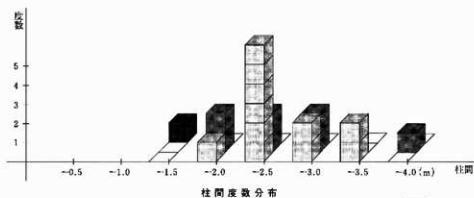
**床面積** 床面積についても同様に時期別変化を第264図に示した。

中期後半以前では、0㎡～30㎡で規模が小さいが、中期後半には10㎡～60㎡まで規模が大きくなり多様化している。後期に入ると、30㎡～40㎡で定形化している。

**柱間と床面積** 次に、住居跡の平面形による違いであるが、第265図に柱間と床面積の度数分布を示した。まず柱間の度数分布を見ると、円形のものを中心として比較的2.0m～3.0mのところまでまとまっている。一方、床面積の度数分布を見ると、円形がやや規模が大きいところに集まっているように見えるが、全体として散在しており、床面積には特定面積に集中するような現象は認められない。すなわち、平面形が円形・方形を問わず、住居跡の規模は分



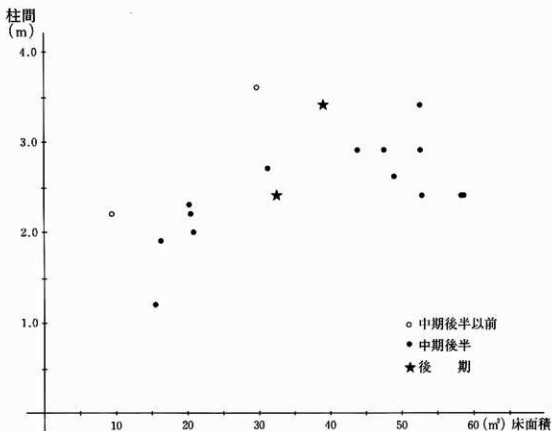
第264図 床面積変遷図



第265図 柱間・床面積度分数分布図

散し、多様化しているのに対し、柱間は集中する傾向があることから、住居は柱間、すなわち棟柱の大きさに制限があるものの、それらの主柱数を増やすことによって組合せ、規模の拡大を行っていると言える。また、それが最も多様化するの、中期後半であり、主柱穴の増加、床面積の分散は、この中期後半の様相を示しているにほかならない。

次に床面積と柱間の相関図を第266図に示した。また、ドットの種類を変えて時期別の比較も可能にしている。この図から、中期後半以前には柱間を延ばす割に床面積が大きくなっておらず、中期後半になると柱間の割に床面積を大きくすることに成功している。こ



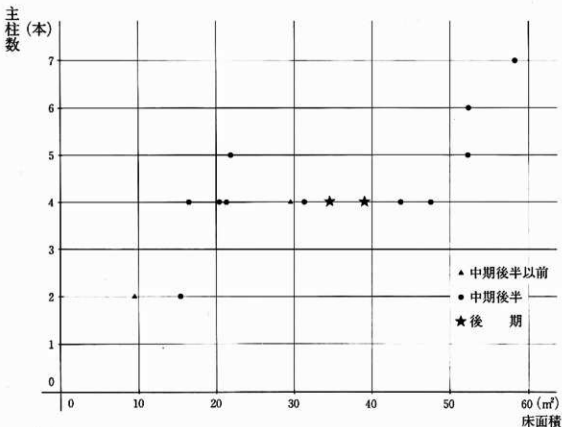
第266図 床面積・柱間相関図

これは主柱数を多くすることによるものである。

次に主柱数と床面積の相関図を第267図に示した。また、ドットの種類を変えて時期別の比較も可能にしている。この図からも中期後半の多様性が再確認することができる。さらに主柱数が4本の時に最も面積の幅があり、床面積で50㎡を越えると主柱数が多い割に床面積が広がっておらず、技術的な意味での床面積の限界性を示している。

第55表 住居跡主要素変遷表 ( )内は実数、他の数字は比率

	中央土坑					平面形		主柱数					高床部				
	a	b	c	d	d'	e	円	方	長	方	2	4	5	6	7	無	有
中期後半以前	100 (2)						50 (1)	50 (1)			50 (1)	50 (1)				100 (2)	
中期後半		23 (3)	69 (9)	8 (1)			54 (7)	36 (5)	8 (1)	8 (1)	50 (6)	17 (2)	8 (1)	17 (2)	100 (13)		
後半						50 (1)	50 (1)	50 (1)	50 (1)		100 (2)					50 (1)	50 (1)



第267図 主柱数・床面積相関図

#### 4. 高床部

後期に属する方形の住居跡 (SH16) の1棟のみ検出された。3壁に沿って確認できたが、全周するものかどうかは明らかではない。西辺の南端が若干窪んでいるが、何に起因するものかは不明である。



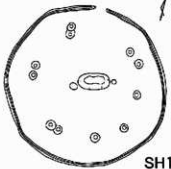


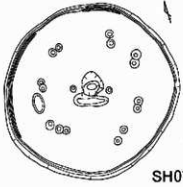


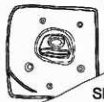

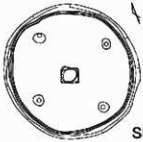
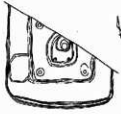
#### 5. 柱穴から土器が出土した住居跡について

SH02・SH05・SH15の3棟の柱穴の中から、完形ではないが比較的大きな土器片が出土した。これらの土器片は単に偶然混入したのではなく、依存状況から柱の抜き取り穴に人為的に置かれたものと考えられる。

SH02では同一個体の壺が2つの柱穴に分かれて出土しており、時期は弥生時代中期後半である。SH05では高杯の脚と口縁部が出土しており、時期は弥生時代中期後半である。SH15では甕・高杯・壺・有孔土器が出土しており、弥生時代後期後半である。

これらの住居跡には、住居の平面形、中央土坑の形態、規模などにおいて共通点はなく、出土した遺物についても特に集中する傾向はない。しかし、土器が出土しない同一時期の住居跡も存在し、何らかの区別は窺える。

これまで、この種の出土状況について桑原隆博によりまとめられている<sup>m)</sup>。氏はこの状況は弥生時代中期中葉から始まり、分布は西日本一帯に認められるとし、抜き取り穴に土器を入れることはその場所で建て替えを行わず廃棄することを示しているとした。さらに全

	円形・楕円形	方形・長方形	
中期後半以前	 <p>SH09</p>	 <p>SH03</p>	
中期後半	 <p>SH14</p>	 <p>SH04</p>	 <p>SH13</p>
	 <p>SH01</p>	 <p>SH02</p>	
	 <p>SH05</p>	 <p>SH07</p>	 <p>SH12</p>
後期	 <p>SH15</p>	 <p>SH16</p>	

第268図 住居跡変遷図

ての建物で行われていないことから「特別な住居・建物で、集落の存亡にも関わるがために行われる祭祀行為であろうと推察される。」とした。

美乃利遺跡では、土器が廃棄された住居跡以降にも住居跡が存在したと考えられることから、「集落廃絶」までは行われず、平面形、中央土坑の形態、規模などに反映しない特別な住居の廃絶であったのかもしれない。

## 6. ま と め

以上、住居跡の要素のうち、中央土坑、主柱穴数、柱間、床面積、高床部について検討した。それをまとめたのが第55表と第268図である。

美乃利遺跡の住居跡は円形・楕円形・方形・長方形からなるが、円形系のものも方形系のものも、特に時期は限定できず、いずれも中期後半以前には存在している。ただし、規模はやや小さいもののみ確認されている。

やがて、中期後半になると、柱間を延ばさずに主柱穴数を増やすことによって規模の拡大に成功する。それは、規模の多様化という変化と連動する。また、中央土坑についても楕円形の炭をもった土坑(A)と円形の土坑(B)のセットが出現する。この種の中央土坑は播磨地方から、東は摂津北部、丹波において認められているもので、一般に中期後半ごろに播磨地方において出現するものと言われている。用途は不明であるが、楕円形をした炭を持つ土坑(A)が円形の土坑(B)の南側に認められるという共通性がある。今回は用途が明確に出来る状況ではなかったので、その点については特に触れることはできない。

やがて中期後半でも新しくなると、SH12のように炭をもった土坑が壁際に移動する。

また、中央土坑の周りには土手が認められるようになり、後期へと継続する。

後期の住居跡については資料数が少ないため、明確にできないが、住居の規模、柱間、主柱穴数など、平面形以外は画一的になる。中央土坑は、形態化したA土坑が検出されたSH16も認められたが、後期後半のSH15のように2段掘りの円形土坑のみが認められるものもある。

以上が美乃利遺跡での堅穴住居跡の変遷である。資料の絶対数に限界があることや、出土遺物が明確でなく、時期が不安定なものも多い。今回提示した当遺跡での堅穴住居跡の変遷が、堅穴住居跡に対して一般的に当てはまるものか、あるいは住居の規模・性格によって異なるものかはさらに検討する必要がある。

## 【註】

- (1) 桑原隆博「弥生および古墳時代における柱穴内出土土器」『芸術古墳文化論考』1985



## 第3節 畠

### はじめに

**資料の意義** Ⅲ区からⅣ区にかけての第1面において畠作にともなう畝立て遺構を検出している。この遺構は、当地域を含め畿内地域においても種類の少ない資料であるとともに、当時の畠作の実態の解明、さらには当時の土地利用を検討する上で貴重な資料と考えられる。そこで、当遺跡で検出した畝立て遺構について、若干の検討を加えることにしたい。

具体的には、畝立て遺構の概要・立地・規模・時期・耕作作物・屋敷地との位置関係等について、調査例・絵画資料・文献資料等をもとに検討する。

### 1. 畝立て遺構の概要

**概要** 今回の調査で畝立て遺構を検出したのは1箇所である。しかし、この畝立て遺構は、溝の方向およびそれらの間隔から4区画(畠1～畠4)で構成される。なお、各区画の詳細については、第3章及び以下の第56表を参照されたい。

第56表 美乃利遺跡畠一覧表

	畝数	畝幅		規模		面積	
		m	尺	m	丈	m <sup>2</sup>	反(歩)
畠1	6	1.60~2.60	5.2~8.5	16.8×39.0	5.5×12.9	655.2	0.55(198)
畠2	(4)	1.76	5.8	9.7×28.3	3.2×9.3	274.5	0.23(82.8)
畠3	2	1.12~2.00	3.7~6.6	4.6×24.6	1.5×8.1	113.1	0.09(34.2)
畠4	5	1.28~1.60	4.2~5.2	13.4×30.0	4.4×9.9	402.0	0.33(118.8)

※ ( )内は復元値

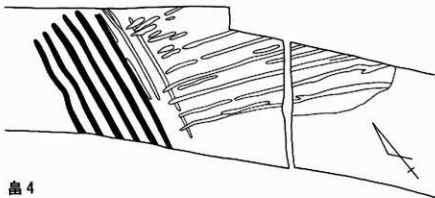
※※ 1尺=0.303m、1丈=3.03m、1反=1,190m<sup>2</sup>、1反=360歩として換算

**開墾順序** これら4区画は、その畝立て方向が大きく2方向に分類できる。同方向の区画相互に切り合い関係が認められるとともに、方向の異なる畠3と畠1・畠2との間にも切り合い関係が認められる。そして、このような切り合い関係をもとに、畠4→畠3→畠2→畠1の順に造られていったものと復元できる(第269図)。

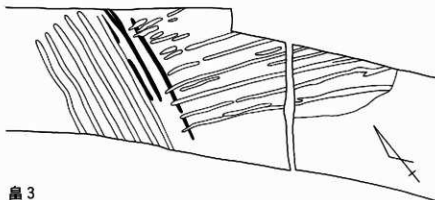
### 2. 立地

**美乃利遺跡** 畝立て遺構を検出した地区は、第3章で復元した当遺跡周辺の微地形(第19図)において、微高地の中央部に近い所にあたる。また、当該遺構を検出したⅢ区～Ⅳ区第1面の微地形の復原(第270図)においても、北側から南側に舌状に張り出す微高地上に立地することがわかる。畝立て遺構の標高は、6.94mから6.66mの間である。

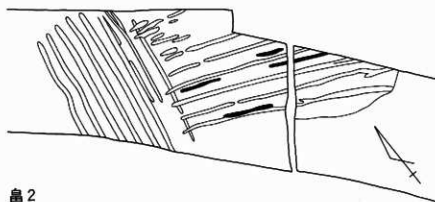
また、畠1の南側から東側にかけてと、畠4の西側とは約15cmの比高差をもって明確に低くなっており(第271図)、この変換部に溝が掘削されている。そして、この溝の西側に



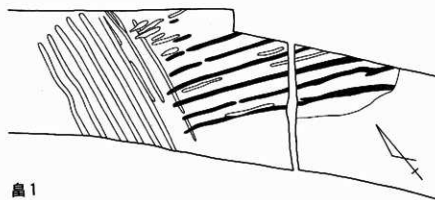
畠 4



畠 3

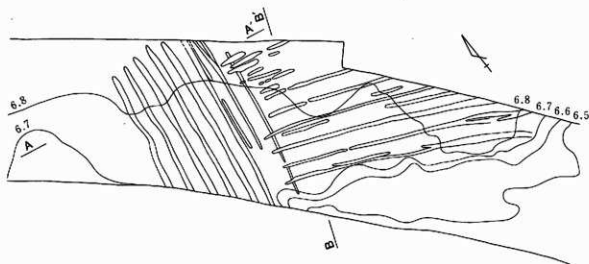


畠 2

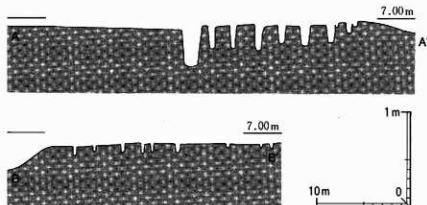


畠 1

第269図 畠の変遷



第270図 畠の微地形



第271図 畠横断面図

は鋤溝等が検出されていることから、水田域となっていたものと考えられる。ここにも、上記で明らかとなった立地をより明確に読み取ることができる。

**類例** 平安時代を中心とした時期の畠跡の報告例を一覧表にまとめたのが第57表・第58表である。これによると、畠跡を検出した地点の地形をみると、いずれも微高地上・台地上・自然堤防上・砂堆上に立地している。報告によって、その表現は多少異なるが、いずれも周囲より高い場所に立地するものである。これは、美乃利遺跡の事例とも一致するものである。また、池島・福万寺遺跡<sup>(1)</sup>においても、周囲より高い所を畠地とし、より低い所を水田としている状況が調査で明らかとなっている。

**絵面資料** 中世の水田および畠地が描かれた主な絵面資料をピックアップしたのが第59表・第60表である。このなかで、水田と畠地が同一面に描かれたものが数例認められる。このなかで『一遍上人絵伝』巻二では、周囲より高いところに畠地が描かれ、それより一段低い位置に水田が描かれている。同資料のなかには、畠地と水田の間に明確な段差を描いた場面も認められる。つまり、当時において、畠地は高い所、水田は低い所というイメージがすでにできあがっていたものとみることができる。また『法然上人絵伝』では、畠が周囲より高い位置に描かれており、上記と同イメージを読み取ることができる。

**小結** 以上のように、調査結果と類例及び絵面資料に共通する特徴を認めることができる。

## 3. 規 模

**畝 幅** 第56表と第57表・第58表を比較しても明らかなように、畝幅が60～70cmのものが多いのに対して、当遺跡の畝幅は平均約1.5mと、他の2倍以上である。三ツ木皿沼遺跡の1.1～1.3mが唯一、当遺跡の規模に近い例である。基本的に、当遺跡の畝幅が他の調査例の2倍であることから、前者を一条植とすると、当遺跡は二条植であったと考えられる。

**絵画資料** 『伊勢物語絵巻』には、野菜の二条植えが描かれている。ただし、同じ画面に描かれている一条植えの畝と比較すると、明確な規模の差を読み取ることは困難である。両者には植え付け作物の種類の違いが認められるのみである。

**文献資料** 近世の農書である『耕稼春秋』<sup>(2)</sup>第三巻の大麥の項においては、広畝に横方向に二尺ほどの小さい畝を作って播く「人和播き」にするとの記述がみられる。これから、具体的な規模は明らかにできないが、麦作の畝幅は広がったことが推察される。

**小 結** 後述するように、当遺跡でもムギが出土しておりコメとムギの二毛作と考えられることから、上記の農書と共通する。

**畝 高** 畝上面が削平されている可能性も十分考えられるが、畝1～畝3は12～14cm、最も深い畝4で25cmを測る。このなかで、降下火山灰に覆われて埋没した群馬県下の検出例（第57表・第58表）は、削平等を受けておらず良好な状態で検出されている。このように埋没した例をみると数cm～30cmを測り、10～20cmの例が多い。これと比較すると、美乃利遺跡例は平均的な深さとみることができるといえる。

ところで、能登 健は、畝の形態からa種（乾燥地型）とb種（湿潤地型）とに大きく分類されている<sup>(3)</sup>。この分類は古墳時代の資料を対象にしたものであり、時期の大きく異なる当遺跡の例との比較には大きな危険性を伴うが、これまで検出された両時期の畝状遺構には明確な差が認められない。そこで、上記の分類を当遺跡の資料に当てはめると、b種に分類できる。しかし、7の二毛作の項で検討するように、水田二毛作は耕地の乾田化を前提としたものであり、その背景に完新世段丘の形成を考えたことから判断すると、上記の分類は意味あるものとは言いがたい。

**作付面積** 調査範囲が限られているため、作付け面積が明確な例は認められない。このなかで比較的良好な状態で検出された長瀬高浜遺跡例<sup>(4)</sup>をみると、最も広い面積で729㎡を測る。これは、美乃利遺跡の畝1よりわずかに広い規模である。よって、当遺跡で検出した畝は、特に大規模なものとは言いがたい。

**小 結** 他の調査例と比較して、畝幅が広い点が当遺跡の特徴といえよう。他の特徴については大きく異なる点は認められない。

## 4. 時 期

**美乃利遺跡** 廃絶時期と開始時期に分けて検討する。

**廃絶時期** 各畝立て溝は、下層および周囲の土によって人為的に埋められている。このため、各溝から出土する土器は破片のものがほとんどで、明確な時期差が認められる。このため、出土土器の示す年代のなかで最も新しい年代が、畝立て遺構の廃絶時期に近いものと考えられる。

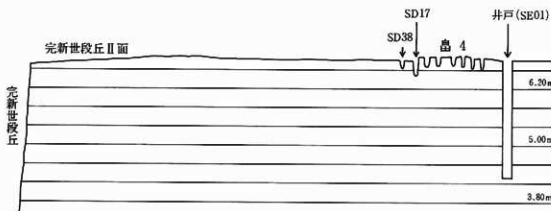
ただし、先述したように、小片での出土がほとんどであることから、時期を特定できる土器はわずかである。このため、各区画の年代を土器をもって明確にすることは困難である。このなかで、土器から最も年代を明確にできるのは畠4で、13世紀前半に位置付けられる(第5章第5節)。よって、畠4は13世紀前半に廃絶したものと考えられる。他の畠についても、出土土器からみる限り大きな時期差は認められない。

- 出現時期** 出土土器からは直接探ることは困難である。ただし、隣接して検出された井戸および埋没完新世段丘をキーワードとした地形環境の変化から、ある程度探ることが可能である。
- SE01** 井戸内から出土した土器から、井戸が埋められたのは11世紀後半と考えられる(第5章第5節)。したがって、井戸を埋めた後、畝立てが行われたものと考えられる。
- 完新世段丘** ところで、井戸を埋める行為について、その原因としていくつかの点が考えられるが、そのひとつとして地下水位の変化があげられる。つまり、地下水位の低下に起因する井戸枯れのため、井戸を埋め戻すことになったのではないかと考えられる。ただし、残念ながら井戸そのものからはこの当否についての判断はできない。

高橋 学によると、当遺跡は完新世段丘Ⅰ面に立地する(第4章第9節)。そして、この段丘崖が南西側に想定され、さらにその南西側には、完新世段丘Ⅱ面と完新世段丘Ⅰ面の境が存在する(第191図)。この完新世段丘Ⅱ面は、古代木-中世初頭に形成されると言われている。この時期は、先に検討した当遺跡における年代観と一致する。そして、井戸の埋没時期とも一致する。また、段丘下段のレベルは井戸の水溜のレベルより低くなっている(第272図)。このことは、完新世段丘の形成にともない地下水位が低下し、この現象が井戸枯れを引き起こし、井戸の埋め戻しに至らしめたものと考えられる。

以上の現象を総合すると、完新世段丘の形成に伴う地下水位の低下にともない当地の高燥化が進行し、畠作への転換が行われたものと考えられる。

- 小 結** 以上から、畠の出現時期を11世紀後半と考えたい。また、畠の廃絶時期については完新世段丘の埋没と何らかの関連があるものと考えられるが、両者の関係については今後の調査成果をまちたい。



第272図 完新世段丘と井戸と畠

## 5. 屋敷地との関係

**美乃利遺跡** ところで、4での検討結果において考えなければならないことがある。それは、畝立て遺構と平面的に重複して検出された掘立柱建物跡（SB09-SB13）との関係である。掘立柱建物跡については、時期を特定できるような土器が出土していないため、その時期を明確にすることは困難である。しかし、井戸（SE01）とは位置的に近く、しかもその主軸方向がほぼ一致する。したがって、掘立柱建物跡と井戸とは同時期のものと考え一つの屋敷地を構成していたものと考えられる。また、同様の理由からSX02についても、上記の屋敷地に伴う屋敷墓と考えたい。そこで、井戸枯れに伴い当地への居住を断念し、当地を高地化したものと考えられる。

なお、居住地（屋敷地）の移転先であるが、畝3・畝4の北東側に隣接する地区で検出されたSB22にその可能性が考えられる。

**絵画資料** 『伊勢物語絵巻』『一遍上人絵伝』『法然上人絵伝』『幕屋絵詞』などに、畝地は屋敷地の周囲に描かれている。

**小 結** 多くの絵画資料で認められたように、当遺跡の畝も、屋敷の周囲にある。黒田日出男<sup>45)</sup>は、屋敷と畝との関係において里畝・山畝・焼畑の3類型に分類され、畝が屋敷に隣接する屋敷畝も里畝に含まれるとされている。当遺跡および絵画資料に認められたものはまさに里畝に分類されるものである。あるいは垣内畝<sup>46)</sup>に相当するものである。

## 6. 条里との関連について

後述（第7章第2節）するように、当遺跡の周囲には条里地割が残存している。この条里地割の方向はN43-44°Eを示す<sup>47)</sup>。そして、畝1・畝2はN65°W、畝3はN10°E、畝4はN9°Eを示す。よって、畝方向は条里の方向とは明らかに異なる。また、先述したSB22はN9°Eを示し、畝の方向とほぼ一致する。

以上から、畝立て遺構は残存する条里とは直接的な関係は認められない。ただし、屋敷地との関係は認められる。

## 7. 耕作作物について

**美乃利遺跡** 畝立て用の溝に挟まれた畝部分を約10m間隔で、土壌サンプルの採集を行った。このサンプルを水洗選別したところ、畝4でムギ1粒を確認した。この他、確実に畝立て遺構に伴うものかは明確にできないが、畝3に伴う溝内の土壌サンプルからはマメ科種子（第4章第4節）を採集している。さらに、畝立て用の溝の埋土から炭化米が約33粒出土している（第4章第4節）。

**文献資料** 『耕稼春秋』にも、水田の裏作としての麦の栽培がみられ「稲刈り後、畝立てして播く」と記述されている。

**水田土壌** 畝の耕作土壌であるが、高橋 学の報告（第4章第9節）にもあるように、その層相から水田土壌と考えられる。このことは、①以前水田であったものを何らかの契機で畝作に切り替えた、②逆に、畝作地を水田に切り替えた、③畝作と水田耕作の二毛作であった、の3つの可能性を示唆する。

**二毛作** まず、4で畝地以前は屋敷地であったと結論付けたことから①が消滅する。次に②であるが、畝部のみ水田土壌層となっており、畝の廃絶にともなって意識的に埋められた土そのものは水田土壌化していない。よって②も消滅する。したがって、③の畝作と水稲耕作の二毛作（水田二毛作）との解釈が妥当ではないかと考えられる。そして、ムギがみつまっていることから、稲と麦との二毛作であったと考えられる。さらに、先述した畝立てにともなう溝から出土した炭化米がもう一方の作物であったと考えられる。

なお、マメも出土していることから、単純に考えると米と豆との二毛作の可能性も考えられる。しかし、『耕稼春秋』によると、豆の栽培時期は米のそれとはほぼ重複する。したがって、その栽培方法については明確にしたい。

**SD39** ここで、畝4とSD39との関係について検討しておきたい。SD39は畝4の各溝の北端部に接するようにある（図版62）。SD39から時期を特定できるような土器だけは出土していないが、平面的にみて関連構間には密接な関係が考えられる。微地形的には、畝4よりSD39の方が高い位置にある。

まずSD39は、西側で11世紀後半以降に掘削されたと考えられるSD17と合流している。この合流部は、SD39の肩幅が広くなるとともに、SD17が東西方向から南北方向に屈曲する箇所で幅が極端に狭くなっている。また、SD39とSD17の底部のレベルを比較すると、SD39のほうが明らかに高くなっている。

ところで、SD39と畝4の各溝との上述した位置関係から、SD39から各溝へ配水していた可能性も考えられる。しかし、畝4の溝は畝作（麦作）に伴うものであり、農書等の記述からは麦作には配水を伴わない。豆作についても同様である。

以上の検討成果、および先に明らかになった水田二毛作を考慮に入れると、SD39は水稲耕時における配水路の機能をなしていた可能性が考えられる。つまり、SD17を含めたこれらの水路は、時期的にみて水田二毛作の開始にあわせて機能しはじめたものと考えられる。

**文献資料** 稲と麦の組み合わせは、文献資料にみられる水田二毛作の組み合わせ<sup>(8)</sup>と一致するものである。

ところで、水田二毛作の成立期については、河音能平が文献資料の検討から平安時代後期まで遡ることを指摘されている。さらに木村茂光<sup>(9)</sup>は、水田二毛作の前提として乾田の開発を指摘し、平安時代中期以降に開始され、平安時代末期には着実に展開していたものと述べている。木村の指摘する乾田の開発の背景には、先述した完新世段丘Ⅱ面の形成が大きく関与しているものと考えられる。すると、高橋 学の完新世段丘Ⅱ面の形成時期<sup>(10)</sup>を考慮に入れると、水田二毛作の開始が平安時代中期（10世紀末）まで遡る可能性が十分考えられる。

**類例** 畝立て遺構の調査で二毛作を確認した例は、管見の限り認められない。女堀遺跡・下田中道遺跡・三ツ木皿沼遺跡・和田山古墳群でプラントオーバー分析の結果、イネ花粉が検出されている（第57表・第58表）。しかし、これまでの成果を考えると、下田中道遺跡と三ツ木皿沼遺跡は9世紀代であり、二毛作との関連で考えるには年代的に古い。そこで、他の2遺跡についてはその可能性が考えられるのではないだろうか。さらに、厩代遺

跡においても、畠土壌＝水田土壌であることからその可能性も考えられるが、年代上の理由から困難と考えられる。

また、畠作物については、下田中野平遺跡では、ソバ・キュウリ花粉が検出されている以外、作物を特定できる資料はみあたらない。

小 結 したがって、当遺跡で確認できた水田二毛作は、確認できる文献資料よりも遡るものである。いずれにしても、水田二毛作の初期の段階に近い資料といえよう。

## 8. 周辺地域における位置付け

類 例 加古川の支流にあたる東条川中流域に位置する天神・戸板遺跡（加東郡東条町）においても畠立て遺構が検出されている。当遺跡の畠立て遺構は、美乃利遺跡とはほぼ同時期のものである。よって、まだこの1例ではあるが、少なくとも加古川水系において当該期には畠作がある程度一般化していたのではないかと考えられる。つまり、美乃利遺跡の畠立て遺構は決して特殊な例と見る必要はないものと考えられる。

文献資料 上記のことを裏付けるように、康平二年（1059）七月作成『播磨国東大寺領畠注進』<sup>82</sup>に「□□郡神木北条戸井村畠八町三段」とみえる。「神木」は加古川右岸に位置する「神吉」と考えられることから、文献資料でも11世紀中頃における加古川下流域での畠作の存在が確認できる。

小 結 以上から、美乃利遺跡で確認された畠作は、当該地域での特殊な例ではなく、一般的なものであったと考えられる。ただし、先に間接的に明らかとなった二毛作については、比較検討する資料がないため、今後の課題といえよう。

## 9. ま と め

以上の検討結果で明らかとなった点をまとめると以下のとおりである。

- 要 点
- ① III区からIV区にかけて検出した畠立て遺構は、当該期の復原された微地形において、微高地上に立地する。
  - ② 完新世段丘の形成に伴う地形環境の変化が、当地に畠作が導入されるきっかけとなった。その時期は、11世紀後半と考えられ、13世紀前半まで継続した。
  - ③ 出土した種子からムギが作られていた。また、畠部の土壌が水田土壌であることから、稲と麦の二毛作が行われていたようである。

歴史的意義 ここで、11世紀後半から13世紀前半にかけてという時期について考えてみたい。

木村茂光<sup>83</sup>は、「11世紀以降、大和を中心とする先進地帯においては、中・小河川の自然堤防上ないしそれに類する水田化不可能耕地が一定の集中性をもった畠地として現出してきており、それも見作率の高い安定的な耕地として存在した」とされ、「10世紀末～11世紀初頭において新たに畠地が収奪の対象に組み込まれはじめ、11世紀第二四半期を契機に一定の法的決着がつけられはじめた」としている。

また長沢 洋<sup>84</sup>は、木村茂光の説を認めた上で、土地支配システムの中における畠という地目の登場、つまり畠地支配文書のあり方に注目している。これによると、「11世紀では畠地という地目そのものが水田の一変種とでもいべき存在であった」とものが、「11世紀



末から12世紀前半にかけて畠地検査の原則が各国衙ごとに転換していき、これに伴って畠地支配文書も水田のそれより分離・独立し、ここに中世土地制度固有の地目としての「畠」が成立する」とされている。

長沢 洋の説に従うと、さきに引用した『播磨国東大寺領畠注進』はこのような歴史的背景のもとに成立したものと考えられる。このように、当該期は、畿内を中心とした地域において、畠作における大きな変革期であったとみることができ。そして、美乃利遺跡で検出した畠が、このような歴史的背景のもとにできたものであると理解したい。

最後に、高橋 学は、二毛作の可能性について、新灌漑システムの未成立を主な理由に否定的である(第4章第9節)。本節において、二毛作が行われていたその可能性が高いと述べてきたことと大きく異なる。この原因は、新灌漑システムの成立に関する考え方である。本論では、SD17・SD39との関連から新灌漑システムの成立を考え、二毛作の成立を考える一因とした。高橋 学によると(第4章第9節)、このような新灌漑システムの成立は13世紀以降とのことであり、年代観に大きな差がある。今後、美乃利遺跡跡をもつて11世紀代まで遡る可能性をも含めて、資料の増加を待ちたい。

本来、二毛作とは1年を単位として行われるものである。今日の発掘調査技術において、美乃利遺跡で検出したような畠状遺構をもって、水稲耕作と畠作が毎年繰り返されていたことを明らかにすることは困難である。したがって、本節で述べたことは、消去法による二毛作の可能性に迫ったにすぎない。今後、調査技術の検討を踏まえ、高橋 学との距離を埋めていく必要がある。

## 〔注〕

- (1) 文献27
- (2) 土屋又三郎『耕稼春秋』(日本農書全集4)農文協 1980
- (3) 能登 健「畑作農耕」『古墳時代の研究 4 生産と流通1』雄山閣 1991
- (4) 文献18
- (5) 黒田日出男「中世農業史・技術史の諸課題 - 中世成立期を中心として -」『日本中世開発史の研究』校倉書房 1984
- (6) 前掲(5)
- (7) 『加古川市史 第一巻』兵庫県加古川市 1989
- (8) 長沢 洋「中世的地目としての「畠」の成立」『史学研究』152号 1981
- (9) 河合能平「二毛作の起源について」『中世封建制成立史論』東京大学出版会 1971
- 00 木村茂光「中世成立期における畠作の性格と領有関係」『日本古代・中世畠作史の研究』1992
- 01 高橋 学「臨海平野における地形環境の変貌と土地開発」『古代の環境と考古学』古今書院 1995
- 高橋 学「播磨灘沿岸平野の地形環境と土地開発」『今里幾次先生古希記念 播磨考古学論叢』今里幾次先生古希記念論文集刊行会 1990
- 02 『加古川市史 第一巻』兵庫県加古川市 1989
- 03 前掲00
- 04 前掲(8)

第57表 島遺構一覧表(1)

遺跡名	所在地	立地	時期
下田中野平	青森県		平安時代
往來上	青森県上北郡東北町		915年十和田a火山灰により埋没
洞ノ口	仙台市宮城野区岩切		平安時代
下ノ内浦	仙台市太白区長町南	自然堤防上	9世紀(灰白色火山灰降下前)
下ノ内	仙台市太白区		平安時代
山口	仙台市太白区		平安時代
日高	群馬県高崎市	日高沖積谷内の微高地	Bスコリア(1108)堆積以前(直前でない)
女堀	群馬県前橋市	大岡ヶ原状地	Bスコリア(1108)堆積直後
荒砥上ノ坊	群馬県前橋市	赤城山南麓末端低台地	Bスコリア(1108)堆積直後
公田地尻	群馬県前橋市	微高地上	鎌倉時代頃
有馬	群馬県渋川市	洪積微高地	Bスコリア(1108)により埋没
新保田中村前	群馬県高崎市	微高地の緩やかな斜面	Bスコリア(1108)堆積前
大八木下小島	群馬県高崎市		Bスコリア(1108)により埋没
緑笹(みどの)	群馬県薊野市	洪積微高地	Bスコリア(1108)により埋没
天引向原	群馬県甘楽郡甘楽町		平安時代
下田中中道	群馬県新田郡新田町	低地部	818年の地震に起因する洪水層下面
下田中川久保	群馬県新田郡新田町	大岡ヶ原状地の一角	9世紀以降
下芝五反田IV	群馬県群馬郡箕郷町	榛名山南麓の白川扇状地	Bスコリア(1108)の下層の洪水砂層下
和田山古墳群	群馬県群馬郡箕郷町	榛名山白川西岸尾板状台地	Bスコリア(1108)堆積前
三ツ木屋沼	群馬県佐波郡城町	早川の左岸低地	9世紀末洪水砂の前段
砂田	群馬県勢多郡新里村		818年の地震により埋没
今井条里	埼玉県本庄市		Bスコリア(1108)により埋没
窪河原	長野県更埭市	自然堤防上	13世紀後半～14世紀
屋代遺跡群	長野県更埭市	微高地上	9世紀後半
三の宮	長野県松本市	微高地上	平安時代中期～後期
蒼尾	奈良県北葛城郡河合町	微高地上	14世紀洪水により埋没
池島・稲万寺	大阪府東大阪市・八尾市	埋没自然堤防上	平安時代(10世紀後半)
天神・戸坂	兵庫県加東郡東条町	東条川の段丘上	12世紀後半
美乃判	兵庫県加古川市	埋没自然堤防上	11世紀後半～13世紀前半
山田郡因北定地	香川県高松市林町		～13世紀
長瀬高浜	鳥取県羽合町	砂丘上	10世紀前半に埋没
錦町第一	鳥取県米子市	砂丘上	平安時代末～鎌倉時代
御座	福岡県北九州市		11～12世紀
御園	福岡県北九州市		平安時代
藤兵衛阪段	鹿児島県姶良郡福山町		桜島大爆發(15世紀)で埋没
橋幸礼川	鹿児島県指宿市		間間岳の爆發(874)で埋没

第58表 畝遺構一覧表(2)

縦		横		栽培作物	その他	参考文献
畝幅 (cm)	畝高 (cm)	畝長 (m)	面積 (㎡)			
				ソバ・キュウリ花粉		1
						18
						25
平均30	平均20	4			他に8世紀後～9世紀前あり	24
						24
						24
78		9.3	44+α			2
70	15～30		2,000+α	イネ花粉		3
						4
						14
					1単位8条	5
約60	3～4	4	15+α			6
						28
30					低地に水田	7
						26
70				イネ花粉		8
						12
					計62条の畝	10
				イネ・キビ花粉		13
1.10～1.30	20～30			イネ花粉		11
						18
						19
						20
					畝土壌＝水田土壌	21
60～70	5～10	10.8	156+α			22
						19
					周囲の低地に水田	27
90	10～15	9.8	133+α		放棄後遺物に	15
1.10～2.60		24～39	655+α	ムギ・マメ	規模の詳細は本報告第56表	
50	12					
50～60						18
70	20					29
						18
						18
40		40				19
40～60	18			イネ花粉		17

## 〔参考文献〕

- 1: 八賀 晋「奈良・平安時代の農業」『考古学による日本歴史2 産業Ⅰ 狩猟・漁業・農業』大塚初重ほか編 1996
- 2: 大江正行ほか「日高遺跡 - 関東自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集-」群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 3: 能登 健ほか「女堀 - 中世初期・農業用水址の発掘調査-」財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 4: 鹿田雄三ほか「荒砥上ノ坊遺跡」『年報 - 2 -』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983 有馬遺跡
- 5: 友廣哲也「有馬遺跡」『年報 - 2 -』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 6: 相京建史ほか「新保田中村前遺跡Ⅰ - 一級河川桑谷川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1分冊-」財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 7: 女屋和志雄「緑芝遺跡群」『年報 - 10 -』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 8: 下城 正「下田中道遺跡」『年報 - 11 -』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 9: 飯塚卓二「下芝清水」『年報 - 13 -』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 10: 木津博明「下芝五反田Ⅳ遺跡」『年報 - 13 -』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 11: 小島敦子「三ツ木皿沼遺跡・小角田前遺跡」『年報 - 13 -』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 12: 大江正行「下田中川久保遺跡」『年報 - 13 -』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 13: 女屋和志雄「和田山古墳群」『年報 - 14 -』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
- 14: 右島和夫「公田池尻遺跡」『年報 - 14 -』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
- 15: 森下大輔「天神・戸坂」『埋蔵文化財年報 1987年度』(加東郡埋蔵文化財報告 9) 加東郡教育委員会 1989
- 16: 『考古学による日本歴史16 自然環境と文化』大塚初重ほか編 1996
- 17: 下山 覚ほか「橋本礼河遺跡Ⅲ - 指宿駅西部土地区画整理事業地名における下水道管きょ付設事業に伴う発掘調査。(指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書04) 鹿児島県指宿市教育委員会 1992
- 18: 八神 興「長瀬高浜遺跡の自跡について」『第12回 桑里制研究会発表資料』1996
- 19: 八賀 晋「奈良・平安時代の農業」『考古学による日本歴史16 自然環境と文化』大塚初重ほか編 1996
- 20: 寺内隆夫「窪河原遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報7』長野県埋蔵文化財センター 1990
- 21: 寺内隆夫「屋代遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報9』長野県埋蔵文化財センター 1992
- 22: 望月 映ほか「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書9 三の宮遺跡」日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・群馬県埋蔵文化財センター 1990
- 23: 佐藤甲二「下ノ内浦遺跡 - 第4次発掘調査報告書-」(仙台市文化財調査報告書第173集) 仙台市教育委員会 1993
- 24: 神成浩志「下ノ内浦遺跡 - 第5次発掘調査報告書-」(仙台市文化財調査報告書第202集) 仙台市教育委員会 1995
- 25: 佐藤 洋「洞ノ口遺跡」『年報16 - 平成6年度-』(仙台市文化財調査報告書第204集) 仙台市教育委員会 1995
- 26: 右島和夫「白倉下原・天引向原遺跡Ⅲ - 甘楽パークキングエリア地内遺跡の調査-」(群馬県埋蔵

- 文化財調査事業団調査報告書第173集) 群馬県教育委員会・(前)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 27: 森本 徹 『池島・福万寺遺跡 発掘調査概要Ⅷ -90-1 調査区 1991年度の調査略報-』財団法人大阪文化財センター 1992
- 28: 能登 健 『群馬県下における埋没田畠調査の現状と課題 -火山災害史への考古学的アプローチ-』『群馬県史研究』17 1983
- 29: 米子市教育文化事業団「米子市 錦町第1遺跡」『鳥取県埋蔵文化財調査センター』鳥取県埋蔵文化財センター 1995

第59表 中世絵画資料一覧表(1)

絵画資料名	資料年代	種類	場 面 ・ 内 容
伊勢物語絵巻	13世紀末	畠	第41段・貧しい男の家の庭先・畝立し野菜を栽培
西行物語絵巻	13世紀半ば	田	徳川美術館本・20紙・川の周囲に格子状の田
西行物語絵巻	13世紀半ば	田	徳川美術館本・25紙・川の周囲に格子状の田
西行物語絵巻	13世紀半ば	田	渡辺家本・絵第三巻・格子状の田
西行物語絵巻	13世紀半ば	田	渡辺家本・絵第三巻・格子状の田
一瀬上人絵伝	1299年完成	田・畠	巻一・格子状の田・一部田のなかに畝立てした畠
一瀬上人絵伝	1299年完成	田	巻一・格子状の田
一瀬上人絵伝	1299年完成	田	巻一・格子状の田(稲刈り後)
一瀬上人絵伝	1299年完成	田	巻一・格子状の田(稲刈り前)
一瀬上人絵伝	1299年完成	田	巻二・格子状の田(稲刈り後)
一瀬上人絵伝	1299年完成	田・畠	巻二・一段高い所に畝立てした畠、低い所に格子状の田
一瀬上人絵伝	1299年完成	田	巻四・格子状の田(稲刈り後)
一瀬上人絵伝	1299年完成	田	巻五・格子状の田(稲刈り後)
一瀬上人絵伝	1299年完成	田	巻五・格子状の田と田よりわずかに高い所に畝立てした畠
一瀬上人絵伝	1299年完成	畠	巻五・人家の周囲に畝立てした畠(冬)
一瀬上人絵伝	1299年完成	田	巻六・人家の周囲に格子状の田
一瀬上人絵伝	1299年完成	畠	巻七・畝立てした畠
一瀬上人絵伝	1299年完成	田・畠	巻七・板屋の周囲に格子状の田と畝立てした畠
一瀬上人絵伝	1299年完成	田	巻八・格子状の田(稲刈り前後)
一瀬上人絵伝	1299年完成	畠	巻八・人家の周囲に畝立てした畠
一瀬上人絵伝	1299年完成	田	巻九・格子状の田(稲刈り前)

第60表 中世絵画資料一覧表(2)

絵画資料名	資料年代	種類	場 面 ・ 内 容
一遍上人絵伝	1299年完成	田・畠	巻九・格子状の田と畝立てした畠
一遍上人絵伝	1299年完成	田	巻九・格子状の田
一遍上人絵伝	1299年完成	田	巻十・格子状の田
一遍上人絵伝	1299年完成	田	巻十一・格子状の田
一遍上人絵伝	1299年完成	田	巻十一・格子状の田・神社の前
一遍上人絵伝	1299年完成	田	巻十一・格子状の田
年中行事絵巻	1165年前後	田	巻十二・格子状の田
法然上人絵伝	14世紀前半	田・畠	巻一・館前に格子状の田・館裏の小高い所に畝立てした畠
愚 婦 絵 詞	1351年	畠	巻五・屋敷の周囲に畝立てした畠・橋で囲い
春日権験記絵	1309年?	田	巻十九・屋敷の門前に格子状の田
春日権験記絵	1309年?	田	巻十九・屋敷の背後に格子状の田
天 狗 草 紙	1396年	田	東寺巻・一段低い低地に格子状の田
声 引 絵	15世紀半ば	田	巻二・一段低い低地に田
声 引 絵	15世紀半ば	田	巻二・格子状の田
桑実寺縁起	1532年	田	上巻・集落の周囲に微地形に対応した水田形態
地藏菩薩霊験記	13世紀半ば	田	格子状の田
松崎天神縁起	1311年	田	巻五・格子状の田
松崎天神縁起	1311年	田	巻五・屋敷の門前に格子状の田

# 第7章 ま と め

## 第1節 遺構の変遷

はじめに 第3章で、地区単位さらには検出面単位で、検出遺構および出土遺物の概要を報告してきた。第4章では、出土遺物を主対象として科学分析の結果を報告してきた。そして、第5章では出土遺物について、第6章では主な遺構について検討を加えてきた。そこで、当節では、ここまでの検討結果をもとに、時期ごとに遺構の変遷をみていくことにしたい。

第3章で報告した遺構検出面および遺物の検討結果（第5章）をもとに検出した遺構を12期に細分する。なお、この12の時期については、間に確認できなかった時期を多く含むものであり、決して連続するものではないことを断っておきたい。また、地区ごとの遺構検出面と時期の関係は下の第61表の通りである。

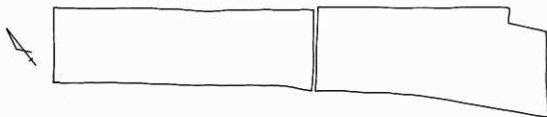
第61表 地区別検出面一覧表

時 期 区 分	地 区 ・ 検 出 面					時 期	備 考
	I 区	II 区	III 区	IV 区	V 区		
第1期	第4面	第4面	第4面	第4面	第4面	弥生時代前期	
第2期	第3面(2)	第3面	第3面	—	—	弥生時代前期	
第3期	第3面(1)	第3面	第3面	第3面	第3面	弥生時代前期末～中期初頭	
第4期	—	—	第2面	第2面	第2面	弥生時代前期末～中期初頭	
第5期	第2面	第2面	第2面	第2面	第2面	弥生時代中期後半	
第6期	第2面	第2面	第2面	第2面	第2面	弥生時代後期	
第7期	第2面	第1面(1)	第2面	第2面	第2面	奈良時代	
第8期	—	第1面(1)	第2面	第2面	—	平安時代前期	古代Ⅱ期(第5章)
第9期	—	第1面(1)	第1面	第1面(2)	第1面(2)	平安時代中期	中世Ⅰ期(第5章)
第10期	—	第1面(1)	第1面	第1面(2)	第1面(2)	平安時代末～鎌倉時代初頭	中世Ⅱ期(第5章)
第11期	—	第1面(1)	第1面	第1面(1)	第1面(1)	中世後半	
第12期	第1面	第1面	第1面	第1面(1)	第1面(1)	近世以降	

第1節 遺構の変遷



第273図 第1期の遺構 (IV・V区)

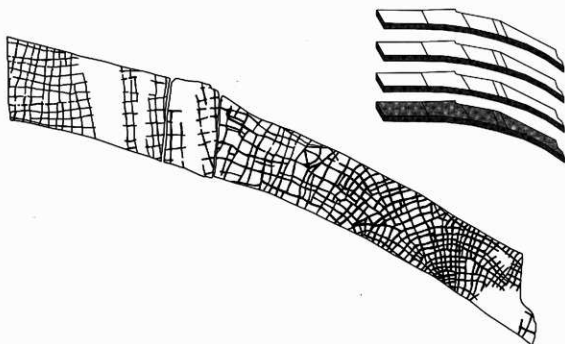


第274図 第2期の遺構 (IV・V区)

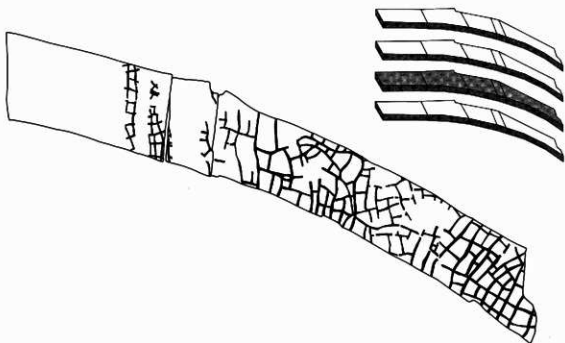
第1期

- 検出範囲 I区からV区にかけての全域で検出した。
- 検出面 第4面で検出している。
- 検出遺構 全域で水田跡を検出した。すべて小区画水田からなり、基本となる畦畔は微地形に沿うように造られている。小区画の平均面積は3.62㎡である (第6章第1節)。
- 時期 弥生時代前期である。





第275図 第1期の遺構（Ⅰ～Ⅲ区）

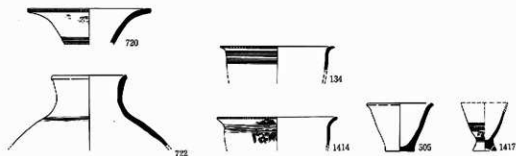
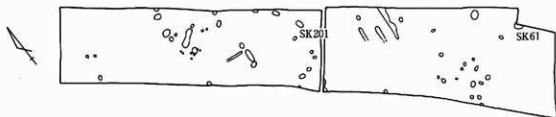


第276図 第2期の遺構（Ⅰ～Ⅲ区）

第2期

- 検出範囲 Ⅰ区からⅢ区にかけて検出した。Ⅲ区においては東側約1/3に限られる。
- 検出面 Ⅰ区は第3面(2)で、他は第3面で検出している。
- 検出遺構 水田跡を検出している。第1期同様、小区画水田ではあるが、平面形が不定形に近く、各区画の平均面積が8.27㎡と第1期より全体的に広がっている（第6章第1節）。
- 時 期 弥生時代前期である。

第1節 遺構の変遷



第277図 第3期の遺構 (Ⅳ・Ⅴ区)

第3期

**検出範囲** Ⅰ区からⅤ区にかけて検出した。

**検出面** Ⅰ区は第3面(1)で、Ⅱ区からⅤ区は第3面で検出している。

**検出遺構** 柱穴・土坑・木棺墓と溝を検出している。Ⅲ区ではこれらの遺構と水田跡を同一面で調査し、同時期の遺構として報告している。しかし、Ⅰ区は第3面(1)と第3面(2)の2面にわたって検出していることから、Ⅰ区第3面(1)で検出した遺構がⅢ区の水田跡以外の遺構と対応するものと考え、水田跡とは別の段階を設定した。

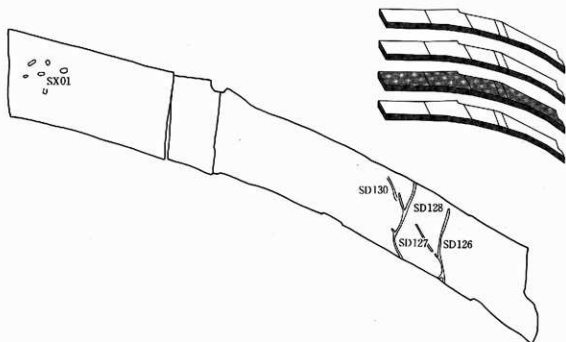
**柱穴** Ⅲ区からⅤ区にかけて検出している。いずれも径10～15cmと小規模なもので、検出面からの深さも10cm前後と浅いものである。これらの柱穴は比較的集中して検出されているが、建物を復元することはできなかった。

**土坑** Ⅲ区の西側からⅤ区にかけての範囲に限られる。大半が1m以下の規模からなるもので、検出面からの深さも10cm前後のものがほとんどである。

これらの遺構に伴う出土遺物もわずかで、これらの遺構の性格を明らかにすることは困難である。

なお、SK61については、出土遺物からみると次の第4期の方が妥当と考えられるが(第5章第1節)、平面および断面精査においても第4期にあたる第2面で検出することはできなかった。

**木棺墓** Ⅲ区で検出した1基(SX01)のみである。弥生時代前期の木棺墓としては、当遺跡を含めた播磨地域ではあまり類例のない資料である。当地域における墓制を検討するうえで、貴重な資料といえよう。その他、木棺墓の近くで検出した土坑についても、土坑墓等の埋葬遺構の可能性も考えられる。ただし、脂肪酸分析等の分析を行っていないため、断定することはできない。



第278図 第3期の遺構（Ⅰ～Ⅲ区）

**溝** I区中央部やや東側とⅣ区で検出している。

I区で検出した溝（SD126～SD130）は、小規模ではあるが、Ⅳ区で検出した溝より明確な遺構である。わずかながら土器も出土している。ただし、これらの溝の機能については明らかにできない。

Ⅳ区で検出した溝は、検出面からの深さが10cm以下のもので、いずれも途中で途切れている。また、遺物が全く出土していない。このため、遺構として報告したが、わずかな谷状の落ち込みあるいは、自然流路の痕跡の可能性も考えられる。

**出土遺物** 全体的に遺物の出土量は少ない。土器と土錘が出土している。

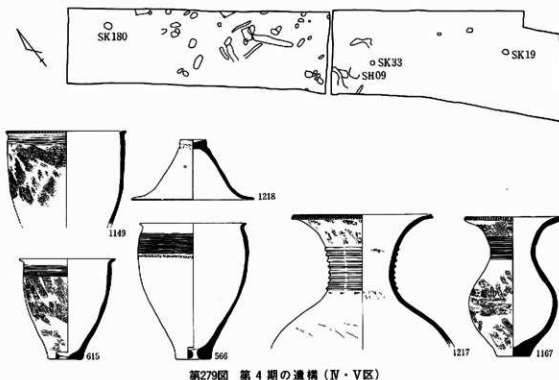
**土器** 次の第4期の土器と比較して、明確な時期差を認めることは困難である（第5章第1節）。一部の土器には第4期の土器より新しい傾向をもった土器も認められる。このため、一部の遺構については、本来第4期の遺構として、つまり第2面で検出してしかるべきものを検出できず、当面で検出したことに起因する可能性も否定できない。

**土錘** SK201から出土した1412の1点のみである。中央部に貫通する柱穴を穿つとともに、土錘中央部を主軸方向に溝が一周している。当遺跡における当時の生業（網漁）の一端を示す資料と考えられる。

**時期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭（第5章第1節）に位置付けられる。

**小結** 遺構の密度が濃くはなく、一部柱穴を検出しているものの、検出した遺構は土坑・溝が中心であることから、集落の周縁部にあたるものと考えられる。木棺墓の検出もこの考えを支持するものである。集落の中心は、微地形から判断して、Ⅳ区・Ⅴ区の北西側にあるものと考えられる。

第1節 遺構の変遷



第4期

**検出範囲** Ⅲ区からⅤ区にかけて検出した。

**検出面** 各地区とも第2面で検出している。

**検出遺構** 掘立柱建物・柱穴・土坑・溝を検出している。

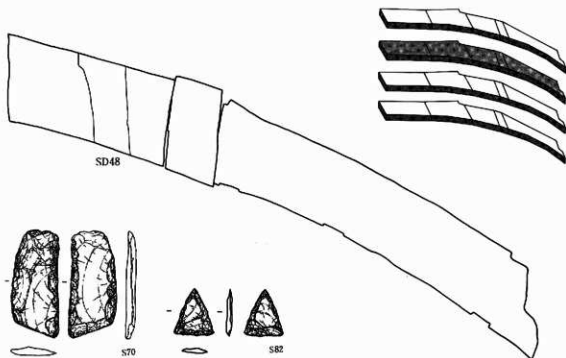
**掘立柱建物** Ⅴ区で3棟(SB30・SB31・SB34)検出している。ただし、SB30については当該期に断定できるものではなく、その可能性が高いものとして報告する。規模のわかるものはSB34のみであるが、いずれも2間×2間以内の小規模な建物と考えられる。3棟とも棟軸方向をほぼ南北方向に向ける傾向が認められる。

**土坑** 約40基検出している。特にⅣ区西側からⅤ区にかけての地区に集中している。全体的に平面形は楕円形で、いずれも2m以下の規模である。各土坑内には比較的多くの土器が埋められており、当該期の土器の大半はこれらの土坑から出土したものである。これらの土坑のなかで注目されるのは、SK33とSK180である。

**SK33** 正立していた壺形土器(400)がその場で押しつぶされた状態で出土している。土器棺の可能性も考えられるが、体部の規模と比較して口径が極端に小さいことから、断定は困難である。土器の規模から、当時の地表面上に突出していた様子が想定される。

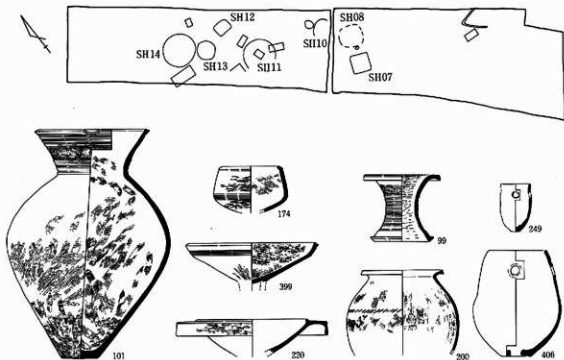
**SK180** 土坑の底にはほぼ完形の壺5点と甕1点が横たえるように置かれていた。ほぼ完形の壺のなかには体部に穿孔されているものも認められる。その他、完形に復元できない土器が多量に出土している。以上の状況から、何らかの祭祀等に使用されたものと考えられる。

**他** 上記以外にも、土器片が多量に出土したSK19については、廃棄土坑の可能性が考えられる。また、土器自体は完形に復元できなく数個体の土器として報告したSK167については、本来は1個体の大型の壺からなるものと考えられる。そして、これらの土器がその場で押しつぶされた状態で出土していることから、土器棺の可能性が考えられる。



第280図 第4期の遺構（Ⅰ～Ⅲ区）

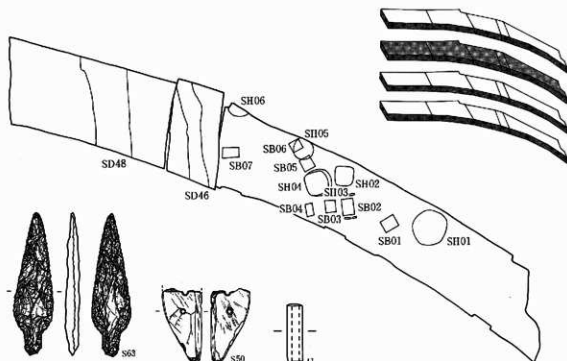
- 他に、土器がほとんど出土しなかった土坑については、土坑墓の可能性も考えられる。
- Ⅲ区のSD48以外はⅣ区とⅤ区に集中する。
- SD48については、出土土器からみると他の土坑・溝より時期的に新しい傾向にある（第5章第1節）。いずれにしても、当該期に掘削されたものと考えられ、環濠として機能していたものと考えられる。
- 他の溝については、長さが短く形態的により土坑に近く、溝状遺構と呼称する方が妥当ではないかと考えられる。遺構の性格については明確にできない。
- Ⅳ区で検出したSH09についても、弥生前期の土器が出土していることから、当該期の遺構の可能性が高い。しかし、当該期の遺構との切り合い関係から遺物の混入の可能性も否定できない。このため、断定はできない。
- 出土遺物 多量の土器と石器が出土している。
- 土器 土坑・溝から多量に出土している。これらの土器の特徴として、明らかに他地域から搬入されたものがない点が指摘できる（第5章第1節）。この他、SK33出土土器（400）については、他に類例がなく特異な土器である。
- 石器 石包丁・石鎌・石皿・叩き石などが出土している（第5章第6節）。
- 時期 第5章第1節で検討した弥生時代前期末～中期初頭に対応する。SD48の時期、遺構相互の切り合い関係の存在から、細かな時期差を内包するものと考えられる。
- 小結 以上、当該期の遺構は土坑が中心である。断定できるものは少ないが、土坑のいくつかに土坑墓・土器棺墓・廃棄土坑等の可能性が考えられたことから、集落の周縁の様相を表わした遺構群といえる。このなかで、SH09が当該期の遺構であるとする、集落の居住域により近いことを示すもの、あるいは先述したように時期差を内包することから当地が集落の居住域に組み込まれていく様子を示したものと考えられる。



第281図 第5期の遺構 (Ⅳ・Ⅴ区)

第5期

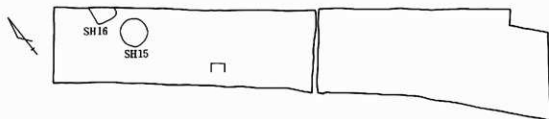
- 検出面** 第2面で検出している。
- 検出範囲** Ⅰ区からⅤ区にかけてひろがっている。
- 検出遺構** 住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝を検出している。
- 住居跡** SH01～SH08・SH10～SH14の13棟を検出している。これらの住居跡は、SH12・SH14を除いては中央土坑の形態を同じくする(第6章第2節)もので、時期的にもほぼ近い時期のものと考えられる。ただし、環濠の一部と考えられるSD48を境に、その南東側(SH01～SH06)と西側(SH17・SH08・SH10～SH14)とに平面的に分かれる。(第281図・第282図)当遺跡の立地する微地形(第19図)を考慮に入れると、SD48の西側が環濠の内側と考えられることから、SH01～SH06が環濠の外側に位置することになる。
- 環濠の外側の住居跡群についても、より詳しくみると平面的にSH01・SH02～SH05・SH06の3つに分けることができる。さらにSH02～SH05については、住居跡相互の切り合い関係が見られ、SH02とSH03では建物の主軸方向が異なることから少なくとも2時期に分かれる。よって、数棟を1単位として住居群が存在したことが理解できる。
- 環濠の内側についても、Ⅳ区西端部からⅤ区中央部に集中している。これらの住居跡のなかにも、中央土坑の形態から微妙な時期差が考えられる(第6章第2節)。よって、環濠の外側と同様、数棟を1単位として住居が存在したことがうかがわれる。
- なお、環濠の内側と外側の住居跡群相互の関係については明確にしない。
- 掘立柱建物** 住居跡群の周囲に集中している。いずれも、1間×1間もしくは1間×2間と小規模な建物である。基本的には、壑穴住居とセットであったものと考えられるが、一部住居跡と掘立柱建物跡とが平面的に重複していることから、セットとなる住居跡相互の時期差によるもの、および住居群との微妙な時期差によるもの等が考えられる。



第282図 第5期の遺構（Ⅰ～Ⅲ区）

- 土 坑** 基本的には住居跡群の分布と一致する。各土坑とも小規模なもので、その機能を明確にすることはできない。
- 溝** 数条検出しているが、注目すべきものはSD46とSD48である。  
SB48は、美乃利遺跡を取り囲む環濠の一部と考えられる。出土土器および土層観察から判断して、当該期以前に掘削されたもので、ある程度埋没した段階で当該期に再掘削されている。  
またSD46についても、当該期に掘削されたものと考えられるが、その方向がSD48とはほぼ平行することから、SD48と同様の機能を果たしていたものと考えられる。したがって、SD46とSD48とで二重の環濠をなしていたものと考えられる。
- 小 結** 以上のように、SD48を境に遺構の分布が大きく2箇所に分かれる。しかし、遺構そのものの時期あるいは性格等に明確な差を指摘することはできない。
- 出土遺物** 住居跡・土坑・溝を中心に土器と石器が出土している。詳細は第5章第2節と同第6節でまとめたとおりである。
- 土 器** 比較的多くの土器が出土しているが、他地域から搬入された土器は認められない。唯一、他地域からの搬入の可能性もしくはその影響が考えられる土器として、SH01出土の釣鐘形鎗壺（100）が考えられる。また、先述したように、SD48を境に2分された遺構群間に明確な差が認められなかったが、土器からみても明確な差を指摘することはできない。
- 石 器** 石鏃・石包丁・柱状片刃石芥などが出土している（第5章第6節）。  
この他、管玉がSH05とSH06から出土している点が注目される。ここで特徴的なのは、管玉の出土が環濠の外側に限られることである。この理解のしかたについては、管玉を他から入手したものか、当地で製作したものも含めて、今後の検討課題といえよう。
- 小 結** 検出した住居跡群の状況から、当該期の集落のほぼ中心部を調査したのと考えられる。

第1節 遺構の変遷



第283図 第6期の遺構 (Ⅳ・Ⅴ区)

第6期

**検出範囲** Ⅰ区からⅤ区にかけて広がっているが、遺構が検出されたのはⅡ区・Ⅲ区・Ⅴ区のみである。

**検出面** 第2面で検出している。

**検出遺構** 比較的少なく、溝4条と住居跡2棟のみである。溝はⅡ区とⅢ区で検出しており、住居跡はⅤ区で検出している。

確認できるものは、いずれも弥生時代後期後半である。

**溝** Ⅰ区からⅡ区で検出されたSD14、Ⅱ区で検出されたSD46、Ⅲ区で検出されたSD47・SD48がある。いずれも北東から南西方向を向いており、ほぼ平行する。これら3条の溝は、弥生時代後期以前に掘削され、後期に再掘削されている。

掘削当時の深さは、SD14が74cmで最も浅く、SD48の東溝が2.1mで最も深い。

このなかで、SD48は環濠の一部と考えられる。弥生時代中期初頭に掘削され、後期後半まで存続したものである。断面形はW字形を呈しており、東側と西側の2本に分かれている。

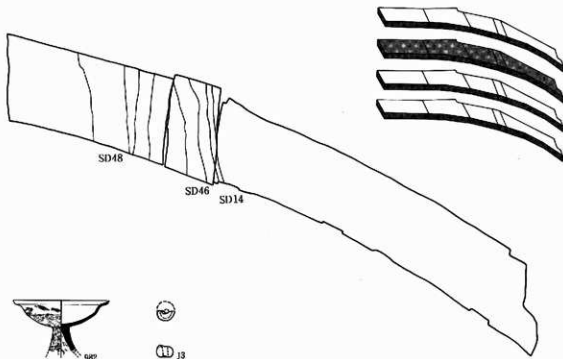
検出面からの深さは東溝で2.00m、西溝で1.91mを測る。この溝は埋没と再掘削を繰り返している(第72図・第73図)が、埋没する最終段階まで2条に分かれていた。

SD46についてもSD48と同じ状況を示しており、同様の機能を果たしていたものと考えられる。溝の方向は北東から南西方向を向いており、断面は浅いU字形を呈する。検出面からの深さは1.40mである。

**住居跡** 住居跡は今回調査した範囲の西端のⅤ区で検出されたSH15とSH16で、いずれも竪穴式住居である。

SH15は円形の竪穴式住居で、4本の主柱穴をもち、中央土坑は2段に掘り込まれ円形を呈する。





第284図 第6期の遺構（I～III区）

出土遺物は土器がほとんどで、柱の抜き取り跡や中央土坑から意図的に置かれた土器が出土したほか、住居跡内の埋土上層からも多くの土器が出土した。埋土上層の土器は、住居が廃棄された後に凹地状になっていたところに土器を投棄したと考えられるものであり、柱の抜き取り跡や中央土坑から出土したものは、住居の廃絶直前あるいは廃絶にともなうものと考えられる。

SH16は方形の竅穴式住居であるが、一部は調査区外に延び、全体の規模は不明である。主柱穴は4本と考えられ、高床部が3方の壁に沿った部分のみ確認でき、おそらく4壁に沿って設置されていたものと考えられる。中央土坑は円形の土坑の周囲に土手が認められるもので、土坑と土手の間には炭と焼土が確認された。

**小 結** 以上のように、弥生時代後期に属する遺構は少なかったが、東側に南北方向の溝、西側に住居跡という景観を復元することができる。SH15とSH16は近接しているが、SH16から出土した遺物は少なく、時間的な関係は明確にできない。

**出土遺物** SD48とSH15の上層から多くの土器が出土した。土器のほかには、SD46上層から紡錘車、SH15中央土坑からガラス玉が出土している。

**土 器** 詳細は第5章第3節でまとめたとおり、後期後半を中心とする時期に位置付けられる。これらの土器の中には、丹波地方などの北からの影響を受けた土器（981・982—図版143）も認められ、「加古川・由良川の道」との関連で注目される。

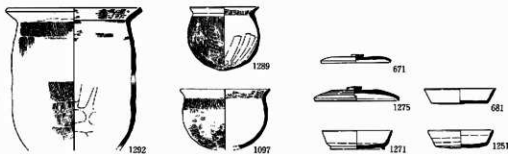
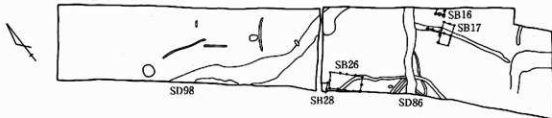
**紡錘車** 1点のみ出土している。

**ガラス玉** 第4章第7節にあるように、カリガラスであると判明した。

**石 器** 第5章第6節にあるように、若干の石器が認められる。

**小 結** 住居跡を検出したことから、当該期の集落のほぼ中心部を調査したことになるが、2棟のみであり、全体の状況は不明である。また、埋葬遺構、生産遺構等は未検出である。

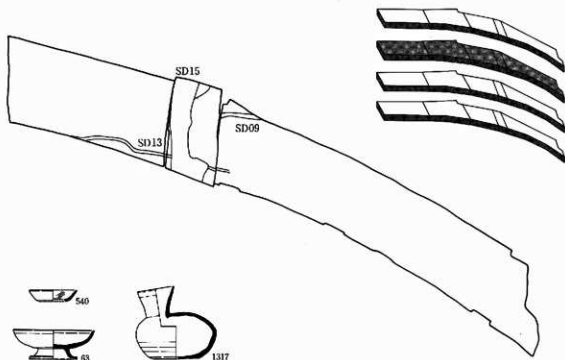
第1節 遺構の変遷



第285図 第7期の遺構 (Ⅳ・Ⅴ区)

第7期

- 検出面** Ⅱ区は第1面(1)で、他の地区では第2面で検出している。
- 検出範囲** 遺構はⅠ区からⅤ区の各地区でも検出されているが、とくにⅣ区に集中している。
- 検出遺構** 掘立柱建物跡・土坑・溝・木棺墓を検出している。
- 掘立柱建物** Ⅳ区ではSB16・SB17、SB26、SB28の4棟の掘立柱建物と、P12、P14、P18～P20といった柱穴を検出している。Ⅴ区ではP25を検出している。Ⅳ区以外の地区では掘立柱建物跡は検出されていない。
- 建物群** 南北方向から西に約50～65°振っている。いずれも側柱建物で、倉庫とみなせるような総柱建物はない。全体の規模がわかるのは3棟で、SB17が2間×3間、SB26は2間×4間である。柱間はSB26が比較的広く、桁行で平均2.15m、梁行平均1.99mあるが、他の建物は平均1.31～1.89mと狭く、ばらつきがある。また、SB16は柱穴の大ききのわりに柱間が狭く、桁行で平均1.28m、梁行平均1.18mしかない。
- 柱 穴** これらの建物の柱穴の掘り方の平面形をみると、SB16の柱穴は全て方形の掘り方であるが、個々の柱穴の方向と棟軸方向は一致していない。また、SB17の柱穴の掘り方は方形と円形のもの混在するが、方形の柱穴の方向と棟軸方向は一致しておらず、これら2様に共通する特徴である。
- SB26の柱穴はほとんど円形であるが隅丸方形のものもある。SB28の柱穴は全て隅丸方形のものであり、その主軸方向は棟軸方向と一致している。
- 奈良時代に一般的と考えられる個々の柱穴の方向と棟軸方向が一致した方形掘り方の柱穴のみからなる建物は当遺跡では見当たらなかった。



第286図 第7期の遺構（Ⅰ～Ⅲ区）

**土坑** Ⅳ区のSK51、Ⅴ区ではSK136という2基の土坑が検出されているのみである。

**木棺墓** Ⅴ区の溝SD98の肩に木棺墓SX03がある。中世の墓SX04と方位は同じであるが、奈良時代の須恵器の坏Bが出土している。

**溝** Ⅳ区にもっとも溝が集中しており、これらの溝の指向する方位は幾つかのグループに分けることができる。中でもSD86やSD61は、先に述べた掘立柱建物跡のN38～55°Eという方向とほぼ一致した方位を指向しており、これらの建物に伴う地割を示す溝と考えることができる。また、SD86は平安時代の遺物も出土しており、その頃まで機能していたと考えられる。Ⅱ区を流れるSD15も同様の方位を指向しており、この溝は現在の道路や水路の方向とも一致している。なお、SD86に切られているSD90・SD91はほぼ東西を指向しており、正方位の地割が先行していることを示している。

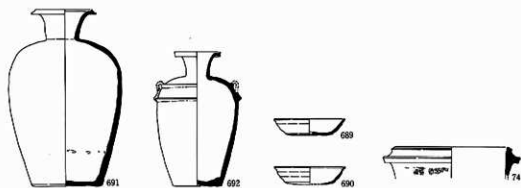
ただし、Ⅳ区からⅤ区に続くSD98はSD86と同様に奈良及び平安時代の遺物が出土しており長期にわたり機能していたと考えられるが、その方向は全く異なっている。

**小結** 以上述べてきたように、奈良時代の遺構の大多数は溝であり、若干の掘立柱建物、土坑と木棺墓がみられた。

**出土遺物** 美乃利遺跡の奈良時代の遺物は、第5章第4節に述べたように、出土した遺物から細かな時期を判断するのは困難であるが、おおむね奈良時代の中頃ぐらいの時期を考えるのが妥当と思われる。ただし、溝の中には平安時代の遺物を伴出するものもある。搬入された遺物は暗文のある土師器、主成分領域以外の胎土をもつ須恵器（第4章第2節）が考えられる。

**小結** 奈良時代の掘立柱建物跡群は、調査範囲中もっとも現況の標高の高いⅣ区の東壁寄りで見出されている。この時代の集落は、調査区外の微高地を中心として広がっていると推定するのが妥当であろう。したがって、今回は集落のごく周縁部分を調査したのみではないかと考えられる。

第1節 遺構の変遷



第287図 第8期の遺構(Ⅳ・Ⅴ区)

第8期

**検出範囲** Ⅱ区からⅣ区にかけて検出している。

**検出面** Ⅱ区では第1面(1)で、Ⅲ区・Ⅳ区では第2面で検出している。

**検出遺構** 掘立柱建物跡と柱穴と溝を検出している。

**掘立柱建物跡** SB18一棟のみである。3間×4間の掘立柱建物であるが、各柱穴掘り方の平面形が方形を呈し、この時期の柱穴としては特徴的である。当建物の示す棟軸方向と西側にあるSD86の方向とは一致しないことも注目される。

**柱穴** P11の1穴のみである。

**溝** SD15・SD30とSD86の3条のみである。SD86は第7期から続くもので、特にSD86は第7期に一端埋没した後、再掘削されている。

なお、SD15とSD86の間隔は、掘り方で80m(最小)、もしくは90m(最大)、底部間で85mを測る。この距離は、1町(約109m)の約4/5に相当する。

また、第7期から引き続きSD15が機能していたものと考えられる。ただし、当該期の遺物が出土していないため、どの程度の規模であったのかについては明確にできない。

**出土遺物** 第5章第5節で検討したように、須恵器・土師器・緑釉陶器が出土している。

**須恵器** 当遺跡の北約9km西に分布する志方古窯跡群産(第4章第2節)の坏Aと壺が出土している。地理的にも近いことから、志方古窯跡群産の製品の消費地であったことが明らかとなった。

**緑釉陶器** 椀の口縁部片が出土している。